

中国横断自動車道姫路鳥取線（智頭～鳥取間）整備事業にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県八頭郡河原町

佐貫上台遺跡

2000

財団法人 鳥取県教育文化財団

中国横断自動車道姫路鳥取線（智頭～鳥取間）整備事業にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県八頭郡河原町

佐貫上台遺跡

2000

財団法人 鳥取県教育文化財団

序

鳥取県は北に日本海を望み、南には秀峰大山をはじめとする中国山地が連なり、鳥取砂丘、山陰海岸に代表される風光明媚な美しい自然に囲まれた土地です。観光資源、農林水産資源に恵まれた当県では、環日本海交流の推進が提唱されるなか、産業の発展、地域の活性化に向けて、近年道路交通網の整備・充実が一段と進められています。こうした中、開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査件数も増加しており、鳥取県の成り立ちを物語る貴重な遺跡が、数多く発見されています。

当財団では、中国横断自動車道姫路鳥取線（智頭～鳥取間）整備事業に伴い、平成12年度に財団法人河原町教育文化事業団から委託を受けて、河原町地内において、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。調査の結果、平安時代末から鎌倉時代、室町時代にいたる中世の遺構および陶磁器を含む多数の遺物が確認されました。河原町域の中世の様相はあまり解明されておらず、今回の発掘調査によって、貴重な資料を提供できたものと考えております。

本発掘調査の成果が、今後の調査研究や教育の一助となり、多くの方々に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、多大なご協力をいただきました河原町の地元の皆様をはじめ、ご指導いただきました方々、関係機関各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成12年10月

財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 有田博充

例　　言

1. 本報告書は、「中国横断自動車道姫路鳥取線（智頭～鳥取間）整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査」として、平成12年度に鳥取県八頭郡河原町佐貫字上台および字岡崎で実施した、埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 本発掘調査は、財団法人河原町教育文化事業団の委託を受け、財団法人鳥取県教育文化財団が実施した。
3. 本発掘調査は、下記の遺跡を対象として実施された。
佐貫上台遺跡（鳥取県八頭郡河原町佐貫字上台98～104、字岡崎115、116、118他）
4. 佐貫上台遺跡出土の白磁・青磁は、太宰府市教育委員会山本信夫先生に分類していただき御教示を得た。明記して深甚の謝意を表します。
5. 本発掘調査の実施にあたっては、調査地内の地形測量および基準杭の設定、ラジコンヘリコプターによる調査前空中写真撮影をそれぞれ業者に委託して実施した。
6. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「用瀬」を使用した。
7. 出土遺物および発掘調査によって作成された記録類は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
8. 本報告書は調査員鬼頭が執筆、編集した。本報告書に掲載した実測図、写真図版は鳥取県埋蔵文化財センターで作成した。
9. 発掘調査から報告書作成にいたるまで、多くの方々からご指導、ご助言、ご支援をいただいた。明記して、深謝いたします。

西尾克巳　榎原博英　山本信夫　河原町　河原町教育委員会　太宰府市教育委員会
鳥取いなば農業協同組合　（順不同　敬称略）

凡　　例

1. 本報告書における方位はすべて真北を示し、レベルは海拔高である。X=、Y=の数値は、国土座標第V系の座標値である。
2. 本報告書において採用した遺構の略称は、以下のとおりである。
SK：土坑　SD：溝状遺構　SS：テラス状遺構　P：ピット
3. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外のものは断面白抜きで表した。
4. 遺物実測図のうち、網掛けのものは赤色塗彩されたものであることを示す。
5. 遺物実測図における縮尺は、下記のとおりである。
土器・石器－1:4　　鉄器－1:3　　五輪塔－1:6
6. 発掘調査時における遺構名は、報告書作成時に一部変更した。遺物に注記した遺構名は旧名を使用しているため、第1章に「遺構名新旧対照表」を示した。
7. 遺構、出土遺物の時期決定に際しては、下記の編年案を参考にした。
森田 勉 1978「太宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『太宰府陶磁器研究－森田勉氏遺稿集』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会
山本信夫 1999「中世前期の貿易陶磁器～その分析視点～」『原遺跡七郎丸1地区・口寺田遺跡』国東町教育委員会
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
八峰 興 1998「山陰における中世土器の変遷について－供膳具・炊飯具を中心として－」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究

目 次

序

例言、凡例

目 次

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	1
第3節 調査体制	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	6
第1節 調査の概要と基本層序	6
第2節 土坑	10
第3節 溝状遺構	14
第4節 テラス状遺構	15
第5節 集石	18
第6節 石列	19
第7節 ピット内出土遺物	19
第8節 遺構外出土遺物	21
写真図版	
報告書抄録	

插 図 目 次

第1図 調査区位置図	1	第14図 SK 6	15
第2図 河原町の位置	3	第15図 SD 1 及び出土遺物	16
第3図 調査区周辺の字名	3	第16図 SD 2 及び出土遺物	16
第4図 周辺遺跡分布図	5	第17図 SD 3	17
第5図 調査前地形測量図	7	第18図 SS 1	17
第6図 全体遺構実測図	8	第19図 集石 1	18
第7図 調査区土層断面図	9	第20図 集石 2 及び出土遺物	18
第8図 SK 1 及び出土遺物	11	第21図 ピット内出土遺物	19
第9図 SK 2 及び出土遺物	11	第22図 石列	20
第10図 SK 3	12	第23図 遺構外出土遺物 (1)	22
第11図 SK 3 出土遺物	13	第24図 遺構外出土遺物 (2)	23
第12図 SK 4 及び出土遺物	13	第25図 遺構外出土遺物 (3)	24
第13図 SK 5 及び出土遺物	15		

図版目次

- | | | | |
|------|-----------------|-------|----------------------|
| 図版 1 | 調査前空撮 | 図版 7 | S D 3 完掘状況 |
| | 調査前全景 | | S S 1 土層断面 |
| 図版 2 | 調査区土層断面 (1 ~ 4) | | S S 1 完掘状況 |
| 図版 3 | S K 1 検出状況 | 図版 8 | 集石 1 検出状況 |
| | S K 1 土層断面 | | 集石 2 検出状況 |
| | S K 1 遺物出土状況 | | 石列検出状況 |
| 図版 4 | S K 3 遺物出土状況 | 図版 9 | 包含層内瓦質鍋出土状況 |
| | S K 3 土層断面 | | 包含層内土師質土器出土状況 |
| | S K 3 完掘状況 | | 包含層内緑釉陶器出土状況 |
| 図版 5 | S K 2 遺物出土状況 | 図版 10 | 調査区北東部分完掘状況 |
| | S K 4 完掘状況 | | 調査区東側半分完掘状況 |
| | S K 5 完掘状況 | | 調査区西側半分完掘状況 |
| | S K 6 完掘状況 | 図版 11 | S K 1 ~ 5、S D 1 出土遺物 |
| 図版 6 | S D 1 土層断面 | 図版 12 | S D 1、2、遺構外出土遺物 |
| | S D 1 遺物出土状況 | 図版 13 | 遺構外出土遺物 |
| | S D 1 完掘状況 | 図版 14 | 遺構外出土遺物 |
| | S D 2 完掘状況 | 図版 15 | 遺構外出土青磁、白磁 |

挿表目次

- | | | |
|-----|-------------|----|
| 表 1 | 遺構名新旧対照表 | 2 |
| 表 2 | ピット一覧表 | 19 |
| 表 3 | 出土遺物観察表 (1) | 25 |
| 表 4 | 出土遺物観察表 (2) | 26 |
| 表 5 | 出土遺物観察表 (3) | 27 |
| 表 6 | 白磁、青磁分類表 | 28 |

第1章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

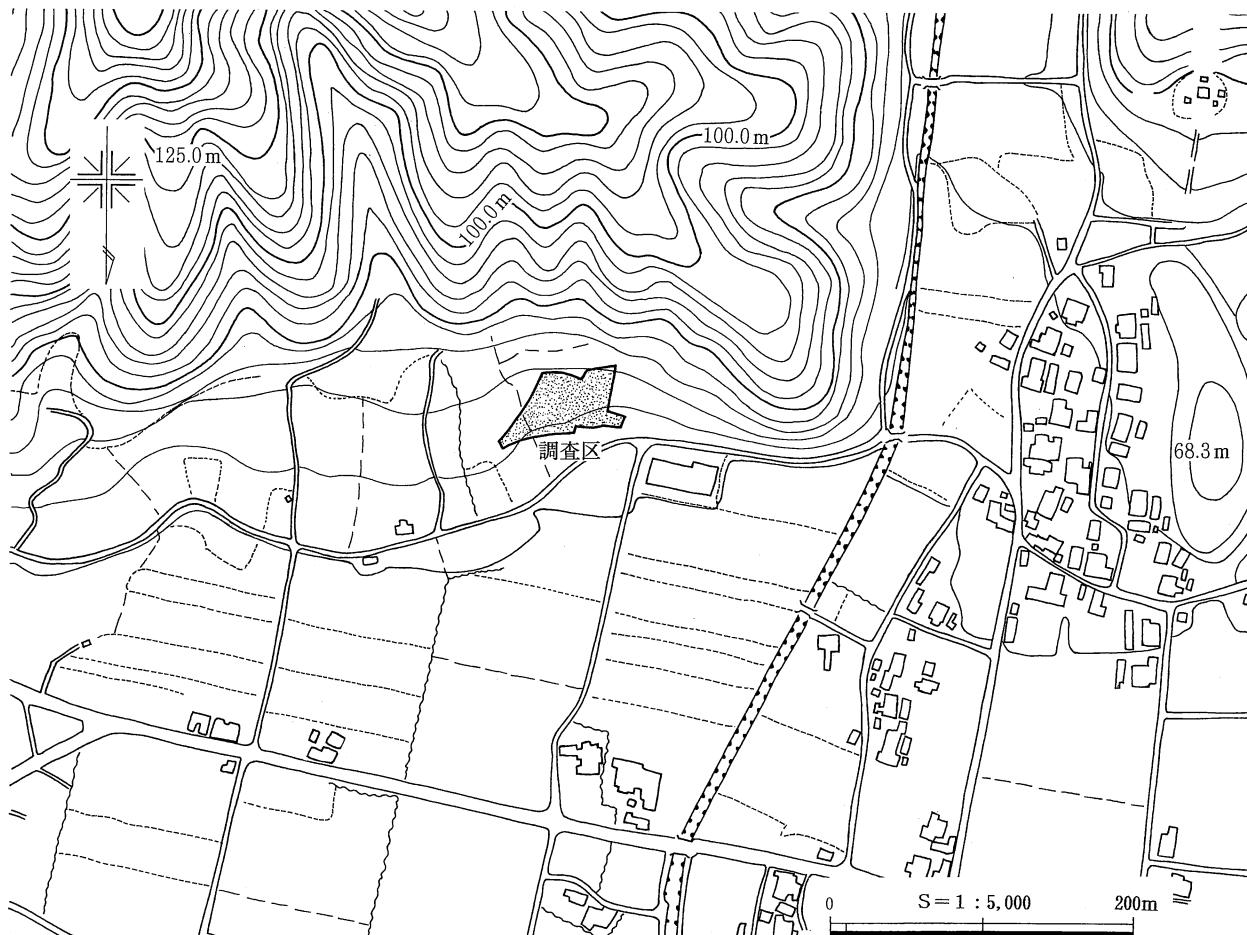
本発掘調査は、中国横断自動車道姫路鳥取線（智頭～鳥取間）整備事業を原因とし、八頭郡河原町佐貫地内の工事予定地内に存在する埋蔵文化財の記録保存を目的としたものである。

道路整備事業に先立ち、平成11年度に河原町教育委員会が佐貫地内の道路建設予定地の試掘調査を行なったところ、遺跡の存在が確認されたため、記録保存のため発掘調査の必要性が生じた。

鳥取県土木部道路課、鳥取県教育委員会、河原町教育委員会が遺跡の取り扱いに関する協議を行い、文化財保護法に基づく手続きを経て、平成12年度、財団法人鳥取県教育文化財団が発掘調査を行うこととなった。調査を担当したのは東部埋蔵文化財調査事務所である。

第2節 調査の経過と方法

佐貫上台遺跡は千代川左岸の台地上に立地する。調査地の南側には標高200～260m級の山が連なり、千代川に臨む調査区北側へ向かって緩やかな傾斜をなす。調査地内は湧水が絶えず、調査中においても排土が流出する恐れがあった。このため、調査区の北側には、事前に農業用水路に沿って土留め柵を設置し、調査にあたった。調査区内の排水には、柿畠に伴う水路をそのまま利用し、調査区の北側の低いところに流れを集中させて沈砂池を設け、そこから排水ポンプで水を汲み上げ、さらに沈砂タンク内で浄化したのち、調査区外の農業用水路へ流した。



第1図 調査区位置図

調査は平成12年4月より着手した。ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影、調査前地形測量を業者に委託して行なった。河原町教育委員会の試掘トレンチの土層断面を補足する形で調査区内に試掘を入れ表土除去の指針とし、遺物包含層直上まで、重機を利用した表土剥ぎを行なった。表土剥ぎ終了後、調査区内に10×10mのグリッドを設定した。調査区南西隅の杭を起点に北へ向かいA、B、C…、東へ向かい1、2、3…と番号を付し、南西隅の交点をグリッド名として呼称した。

調査は調査区の南から北へ向かって進めていった。遺物包含層を掘り下げ遺構面を確認し、遺構の検出と掘り下げを行なった。調査は7月24日に終了し、調査後地形測量は業者に委託して行った。調査面積は2141.5m²である。

第3節 調査体制

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	有田 博充（鳥取県教育委員会教育長）
常務理事	大和谷 朝（鳥取県立図書館館長）
事務局長	岡山 宏徳

財団法人鳥取県埋蔵文化財センター

所長	古井 喜紀（鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次長	八木谷 昇
調整係長	山耕 雅美
文化財主事	高垣 陽子
庶務係主任事務職員	矢部 美恵
事務職員	田中 陽子

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 東部埋蔵文化財調査事務所

所長	八木谷 昇（次長兼務）
主任調査員	北浦 弘人
調査員	鬼頭 紀子 家塚 英詞 森本 倫弘
補助員	佐藤 謙

○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

下記の方々が、発掘作業員、室内整理作業員として従事した。

川嶋 彰	岸田 由利	国本恵美子	国本美智子	下田茂登子	谷 里美	田渕禮次郎
寺坂 悅子	徳田とし子	中村 鈴子	中山壽美子	中山 町子	西田 幸雄	八田 星代
林 鶴子	前田 市郎	森田 輝子	山尾 久	米山 麻紀		

表1 遺構名新旧対照表

新遺構名	旧 遺 構 名	新遺構名	旧 遺 構 名	新遺構名	旧 遺 構 名
SK 1	SK 1	SK 6	SX 1	集石 1	SX 1
SK 2	SK 4	SD 1	SK 8	集石 2	集石 1
SK 3	SK 2・SK 3・SX 2	SD 2	SK 7	石列	石列
SK 4	SK 9	SD 3	SD 2		
SK 5	SK 5	SS 1	SS 1		

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境 (第1~4図)

佐貫上台遺跡は、鳥取県八頭郡河原町佐貫に所在する。河原町は、鳥取県東部のほぼ中央部に位置する。東は八頭郡郡家町、船岡町、西は気高郡鹿野町、東伯郡三朝町、南は八頭郡用瀬町、佐治村、北は鳥取市に接しており、鳥取市と山陽地方を結ぶ国道53号線が、千代川に平行しながら町を縦断する形で走っている。千代川とその支流である八東川、曳田川とが合流する付近に広がる町東域の沖積平野に集落、耕地が集中し

ており、町の西方は急峻な山岳地帯が広がる。平野部では水田耕作が営まれ、山間部の比較的比高の低い場所では、果樹園、畑地、放牧場などに土地を利用している。

佐貫上台遺跡は河原町の南東、宇土川が千代川へ合流する付近に開けた沖積平野と標高234mの樹形山より続く尾根の付け根にあたる台地上に位置する。調査地は南から北へ向かい緩やかに傾斜している。

第2次世界大戦頃まで調査地および周辺一帯では桑畠が営まれていたようだが、養蚕業の衰退に伴い、戦後は富有柿の樹園地となった。

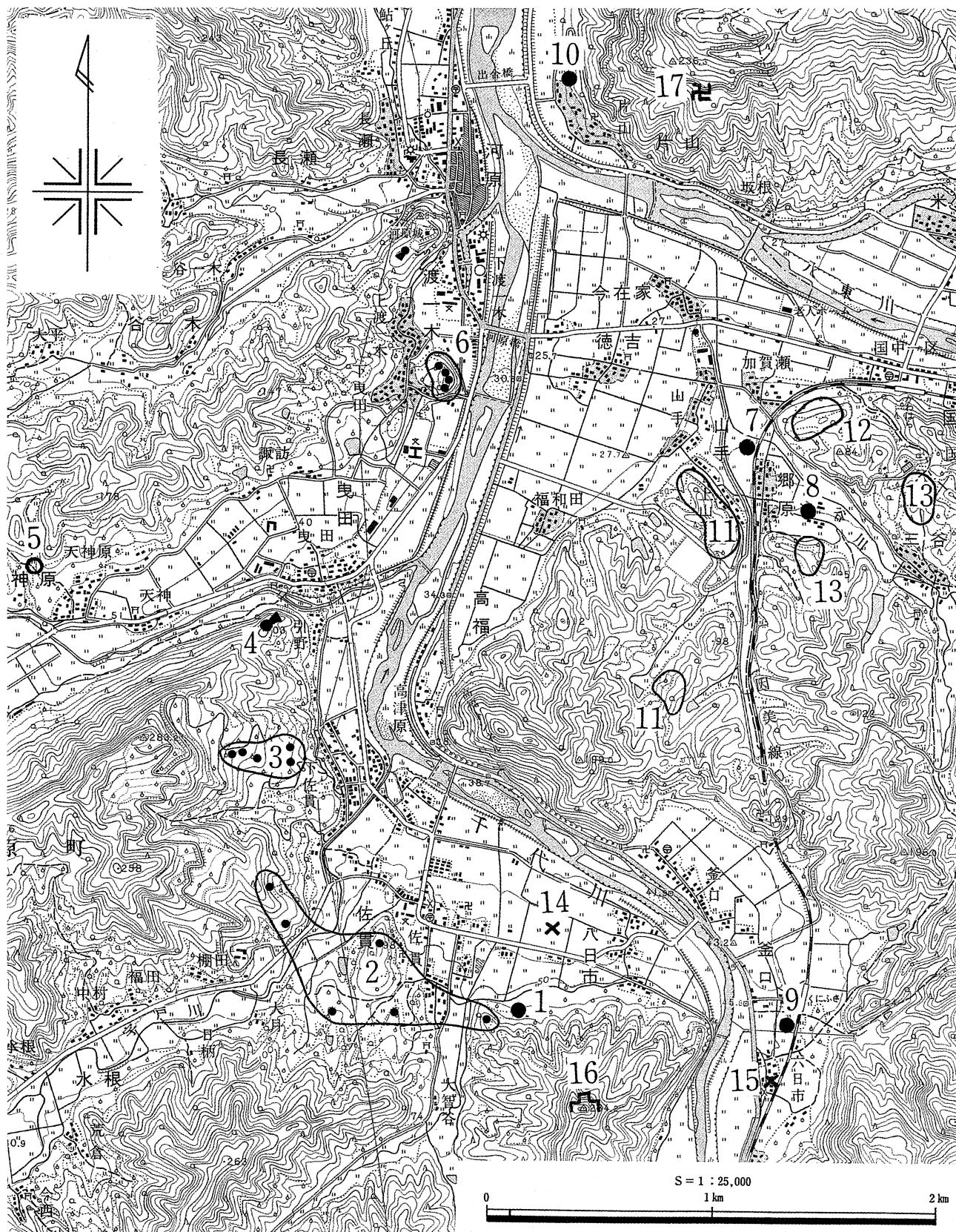
第2節 歴史的環境 (第3、4図)

河原町佐貫は旧因幡国八上郡に属し、『和名抄』に名前も見える古くから集落の開けた土地であった。

古墳時代には、7基の円墳からなる佐貫古墳群（2）が水根から八日市の山裾にかけて作られている。墳径8~14mの小規模な古墳からなり、そのうち1号墳は発掘調査が行われ、両袖式の横穴式石室より須恵器、馬具、



第3図 調査区周辺の字名



- | | | | | |
|-----------|------------|-----------|--------------|-------------|
| 1. 佐貫上台遺跡 | 2. 佐貫古墳群 | 3. 大平古墳群 | 4. 嶽古墳 | 5. 天神原須恵器窯跡 |
| 6. 渡一木古墳群 | 7. 前田遺跡 | 8. 郷原遺跡 | 9. 下中溝遺跡 | 10. 片山遺跡 |
| 11. 山手古墳群 | 12. 加賀瀬古墳群 | 13. 郷原古墳群 | 14. 八日市瓦経出土地 | 15. 釜口銅鉢出土地 |
| 16. 榆形城 | 17. 最勝寺 | | | |

第4図 周辺遺跡分布図

耳環などの副葬品が出土している。宇土川の左岸、佐貫の北西にあたる築瀬山の中腹には大平古墳群（3）、また築瀬山から北東に延びる尾根の先端には、八頭郡最大級の規模を誇る全長50mの前方後円墳、嶽古墳（4）が位置している。

佐貫から北東に3kmほど離れた曳田川左岸の丘陵斜面には、天神原須恵器窯跡（5）が存在する。6世紀後半から末葉という短期間に3基以上の窯が操業していたものと考えられている。

律令時代の八上郡に関する記述は『公卿補任』宝亀3年（772）の条に始まり、『和名抄』（931～937）に記された八上郡十二郷のなかに「散岐」の名が見える。因幡には2500戸が存在し、そのうち八上郡に600戸以上があつたといわれ、因幡六郡のうち八上郡の開拓がもっとも進んでいたものと推察される。大同三年（808）に八上郡と智頭郡の駅馬が減らされたという内容の記述も見られ、山陽へ連絡する交通路も当時より開けていたことが窺われる。八上郡衙は、現郡家町に位置する万代寺遺跡と考えられ、周辺には法起寺式伽藍配置を持つ土師百井廃寺跡、郡衙の需要に応じ土器、硯、瓦などを供給していた私都窯跡群などが存在する。

この時期の河原町では、郷原で集落跡（7・前田遺跡、8・郷原遺跡）が見つかっており、郷原遺跡では10棟の掘立柱建物、柵列などの他、単弁7葉蓮華文軒丸瓦が出土している。また釜口所在の下中溝遺跡（9）からは須恵質の土馬が発見されている。

平安から鎌倉時代にかけて、古代の国郡里制から荘園・公領支配へと体制が移行するなかで、因幡においては律令の郷体制があまり変動しないまま中世郷に発展したものと思われ、在地領主が郷司・保司というかたちで国衙支配にあたった。河原町内には、平安朝以降鎌倉期までに知られた荘園として、高野山領岩田荘がある。佐貫上台遺跡の南に控える樹形城（16）は創立年代は不明だが、福良兵部小輔実滋が長和元年（1020）ころ、古城の跡を切り抜けて近郷を領有し、在城したといわれている。

中世11～12世紀頃の資料としては、河原町天神原と中井の境に位置する羽黒山妙玄寺で明和7年（1770）に掘り出されたという経文18巻がある。経巻は正治2年（1200）のもので、朱字で書かれた法華経が経筒に納められていたという。八日市字滝谷（14）から瓦経、釜口字西土居（15）からは銅鉢が出土しており、当時、修驗道信仰が盛んであった様子が窺われる。靈石山中腹に位置する最勝寺（17）は960年以来荒廃していたが、1193年三河守源範頼が当地を訪れたとき頽廃を嘆き、修理を加え自らこの山に潜居したという。なお、羽黒山妙玄寺、最勝寺とも豊臣秀吉の因州征伐によって消失したと伝えられている。

河原町郷原所在の前田遺跡（7）では、室町時代の屋敷跡が検出され、備前、瀬戸、青磁、白磁などの陶磁器が出土している。また2基の井戸からは、病氣平癒のまじないに使われた呪符や舟形木製品が出土している。

河原町には六日市、八日市、市場尻、市場河原など「市」のつく地名が残る。佐貫にある都波只知上神社は、俗に市大明神と呼ばれ、『因幡誌』には「都波只知の神号は海石榴市の仮名書すなわち名を称する」とあることから、中世の佐貫周辺ではこの都波只知上神社の保護のもと、市が発達していたものと推察されている。

参考文献

- 『河原町誌』 河原町誌編集委員会 1986
- 『前田遺跡発掘調査報告書』 河原町教育委員会 1983
- 『郷原遺跡発掘調査報告書』 河原町教育委員会 1986
- 『歴史時代の鳥取県』 鳥取県埋蔵文化財センター 1989
- 『鳥取県の歴史』 内藤正中、真田廣幸、日置糸左エ門 1997 山川出版社

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要と基本層序（第5～7図、写真図版2）

調査区の土層は西側の壁面を南北方向の観察ラインとし、東西方向にはグリッドのDラインに沿ってベルトを設定し、掘り下げの指針とした。調査区は、基本的に上から順に暗茶褐色系、黒茶褐色系、灰茶褐色系の土が堆積しており、それぞれを礫の混入度合いなどで細分している。

暗茶褐色系の土はローリングを受けた土師質土器の小片をごく少量含む層である。調査区南西側はこの暗茶褐色土の単層からなり、20cmほど掘削すると風化した岩盤に行き当たる。この区域で遺構は検出されなかった。暗茶褐色土は南東側の礫層上にも堆積する。

暗茶褐色系の土の下層は黒茶褐色系の土層である（第7図⑤層）。この層は10～20cmほどの厚みで調査区北側を広汎に覆い、C 4～C 6、D 4～D 6 グリッド付近で非常に薄くなり途切れる。中世から近世、近代に至る土師質土器片、陶磁器片などを含む遺物包含層である。ローリングを受けた土師質土器片を広範囲に含み、C 5～6、D 5～6 グリッドの上層付近で近世、近代の陶磁器片を比較的多く検出している。

黒茶褐色系の遺物包含層の下層は灰茶褐色系の遺物包含層である（第7図⑦層）。この層は黒茶褐色土とほぼ同じ範囲に30cm前後の厚みをもって広がり、中世の土師質土器、須恵器、陶磁器類を多量に包含する。土師質土器の包含量は卓越している。D 3、4 グリッド付近は埋土に混入する礫が比較的大きく、瓦質及び土師質の土鍋が集中して出土する傾向が見られた。SD 2、SK 1、3 でも良好な土鍋を検出しており、この一帯は土鍋の出土が顕著である。白磁、青磁類は包含層内に点在し、とりわけ集中する傾向はない。一部奈良時代から平安時代末期のものを含むが、白磁碗の示す12世紀前半、龍泉窯系青磁碗や受け口の口縁部を持つ瓦質鍋などの示す13世紀代の遺物の出土が顕著である。

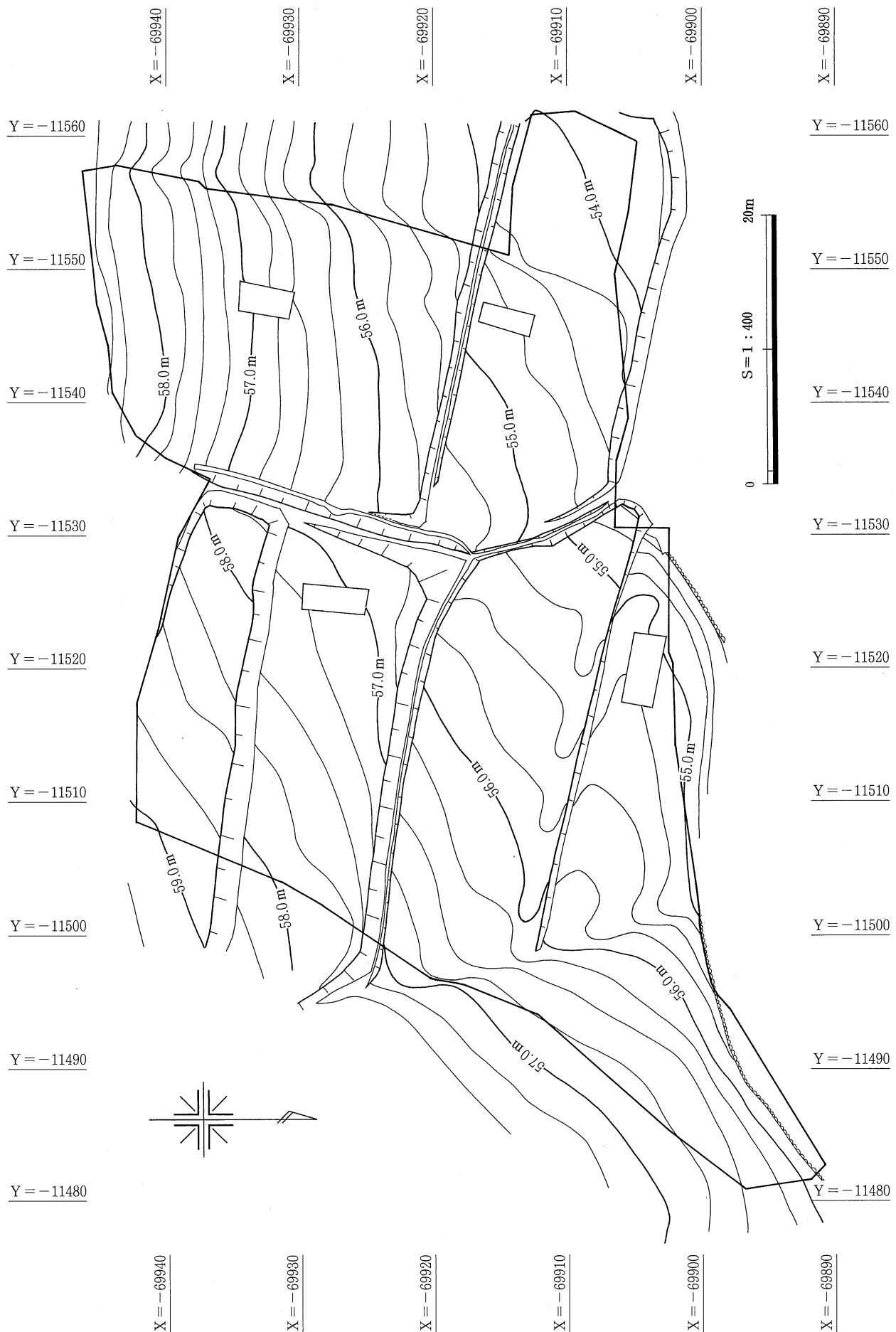
遺構検出面より下層には灰褐色粘質土と黒褐色粘質土が厚く堆積しており、大きな谷が存在したことが確認できたが、これらの層より遺物は確認されなかった。

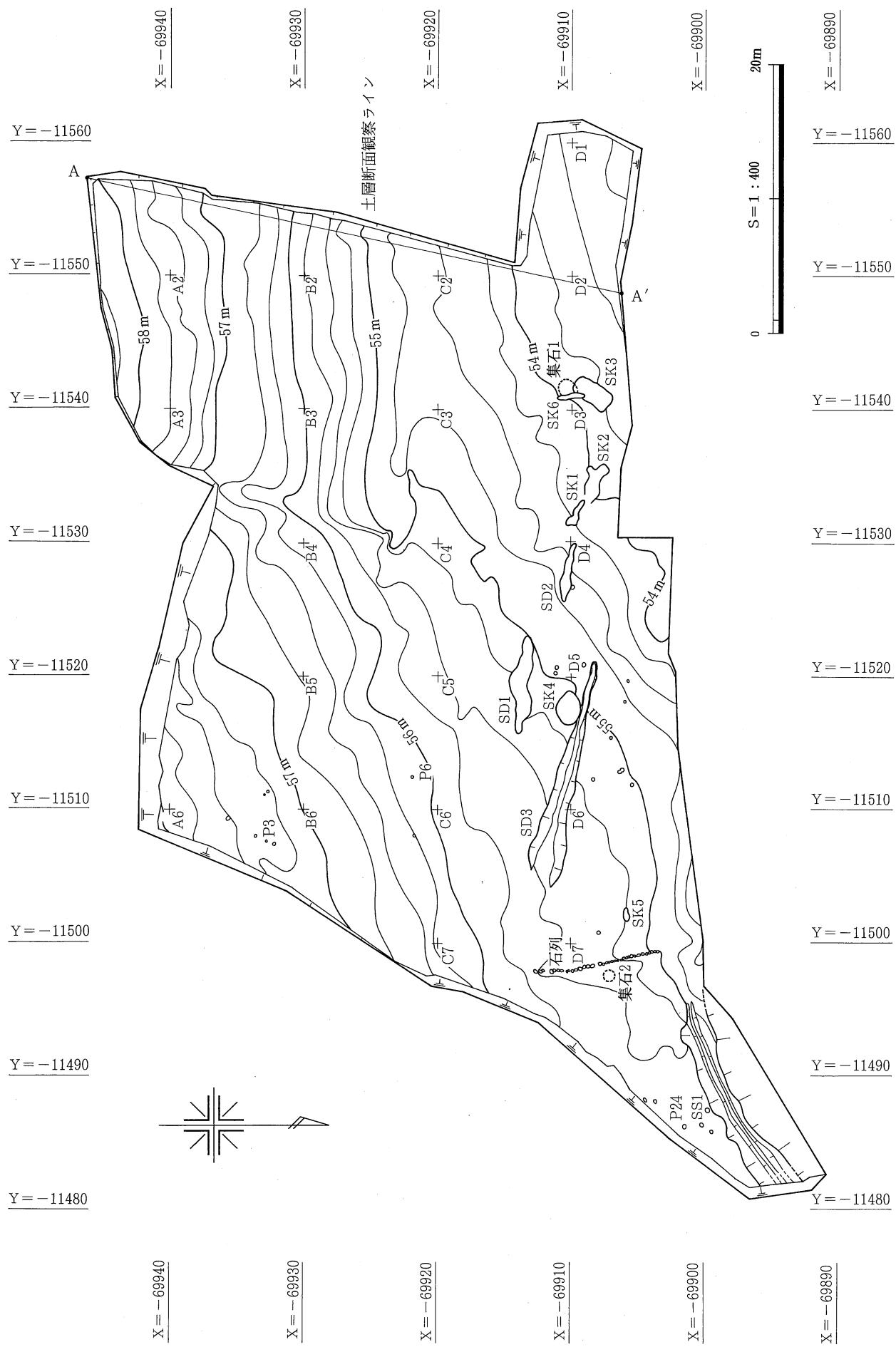
調査区南東側とD 7 グリッド以東では、土層は上述の状況と異なっている。調査区の南東側には黒茶褐色系、灰茶褐色系の遺物包含層は見られず、拳大から30cm大の礫を主体とする礫層が広がる。礫層はグリッドのC ライン付近で黒茶褐色系遺物包含層の上に一部堆積し、調査区中央の水路に断ち切られて消える。基本的には自然堆積と思われるが、A 4、A 5 グリッド付近は攪乱されており、柿畠の区画整理等で土が動かされたものと推察した。礫層除去後A 6 グリッド付近でピットを6基検出したが、礫層内ではローリングを受けた土師質土器の小片をわずかに検出したにとどまった。

D 7 グリッド以東の範囲は地形的にやや高く、表土を10cmほど除去すると、ローリングを受けた土師質土器の小片など、中世を中心とした遺物を含む茶褐色土が現れる。0.6～1mの厚みで、地山まで1層のみの堆積を見せる。この層はC 7、D 7 グリッドを境に西では見られず、黒茶褐色系及び灰茶褐色系の遺物包含層との関係は柿畠の段によって土層が分断されていたため把握できなかったが、堆積状況や遺物の出土状況から見て、畠地造成等に伴い二次的に動かされた土である可能性が考えられた。

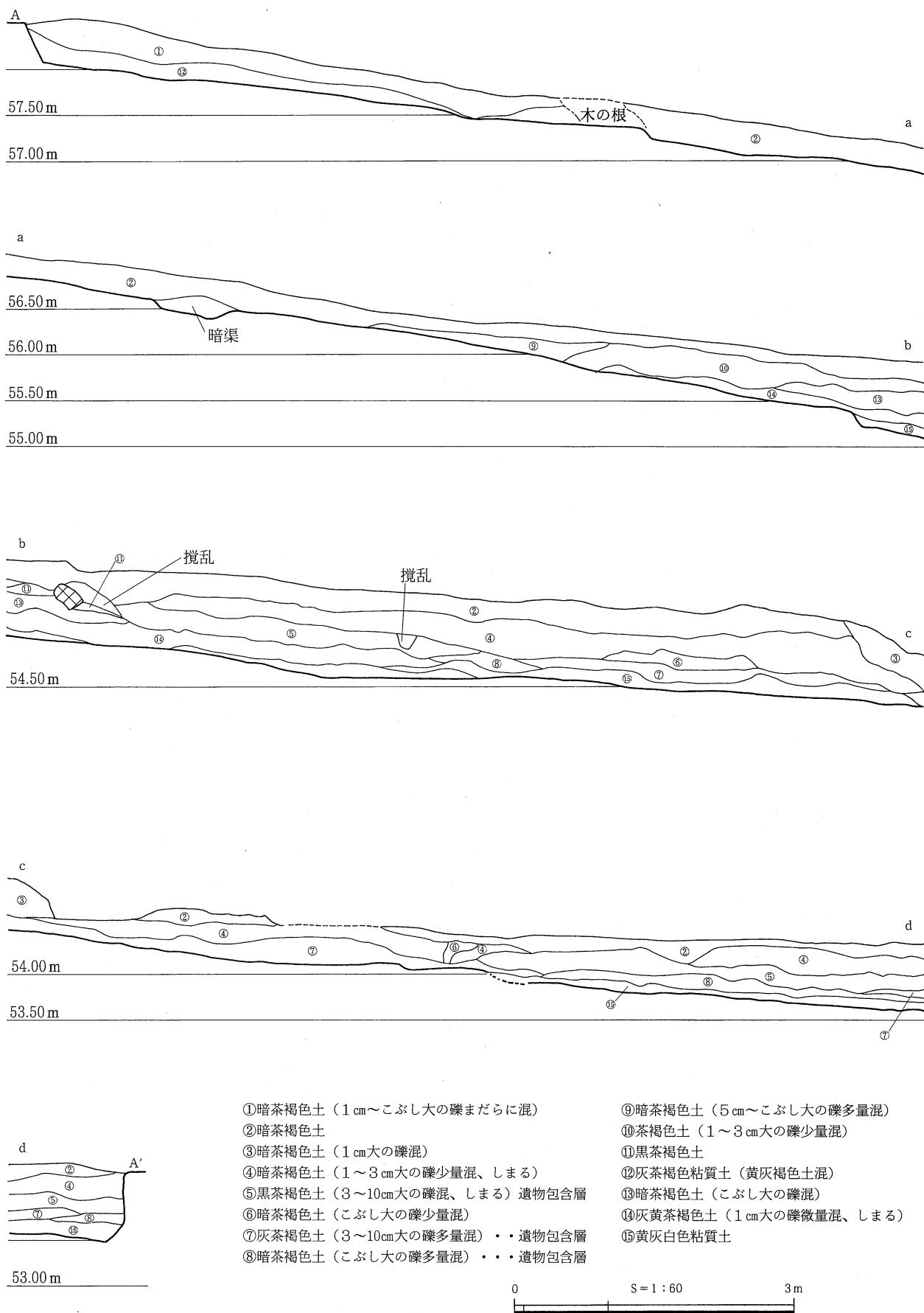
遺構は灰茶褐色土をベースに掘り込まれているものと、灰茶褐色土の下層にあたる黄灰褐色粘質土に掘り込まれたものとがある。C 2～C 6、D 2～D 8 グリッドの範囲で土坑6基、溝状遺構3条、集石2、石列1、テラス状遺構1、ピット17基を確認しており、調査区の北側から集中して検出された。一部時期不明のものもあるが概ね12世紀代のものと考えられる。土坑、溝状遺構とも、その機能及び性格は不明である。

第5図 調査前地形測量図





第6図 全体遺構実測図



第7図 調査区土層断面図

第2節 土坑

S K 1 (第8図、写真図版3、11)

C 3 から D 3 グリッドにかけて位置する。南東から北西方向に長軸をもつ不整形な土坑である。規模は長さ2.25m、幅約50cm、深さは東側で10cm前後、北西側の最深部で20cmを測る。検出面は南東側、北西側とも標高54.3m前後と平坦であるが、土坑底面は南東から北西に向かって緩やかな傾斜を持ち、壁面は垂直に近い掘り込みである。埋土は黒褐色土と灰褐色土の混合層からなり、土坑の底面付近の埋土には炭化物が少量混じっていた。遺物としては土師質の土鍋2個体(1、2)を検出した。いずれも南東側の床面付近で出土したものである。

(1) は「く」の字状に屈曲する口縁で、外面頸部に指頭圧痕が見られる。内外面とも頸部から胴部にかけての上位1/4ほどはヨコハケ、それ以下はナナメ、ヨコ方向のハケメが見える。(2) は(1)に比べやや口縁部の「く」の字の屈曲が緩やかである。風化が著しく調整は非常に見えにくいが、頸部から胴部にかけて、内面に指頭圧痕とヨコハケが残る。外面も頸部以下にヨコハケ調整がわずかに見える。その他、図化できなかったが土師質土器の破片などが出土した。遺構の時期は出土した土鍋の形態から、12世紀と考える。

S K 2 (第9図、写真図版5、11)

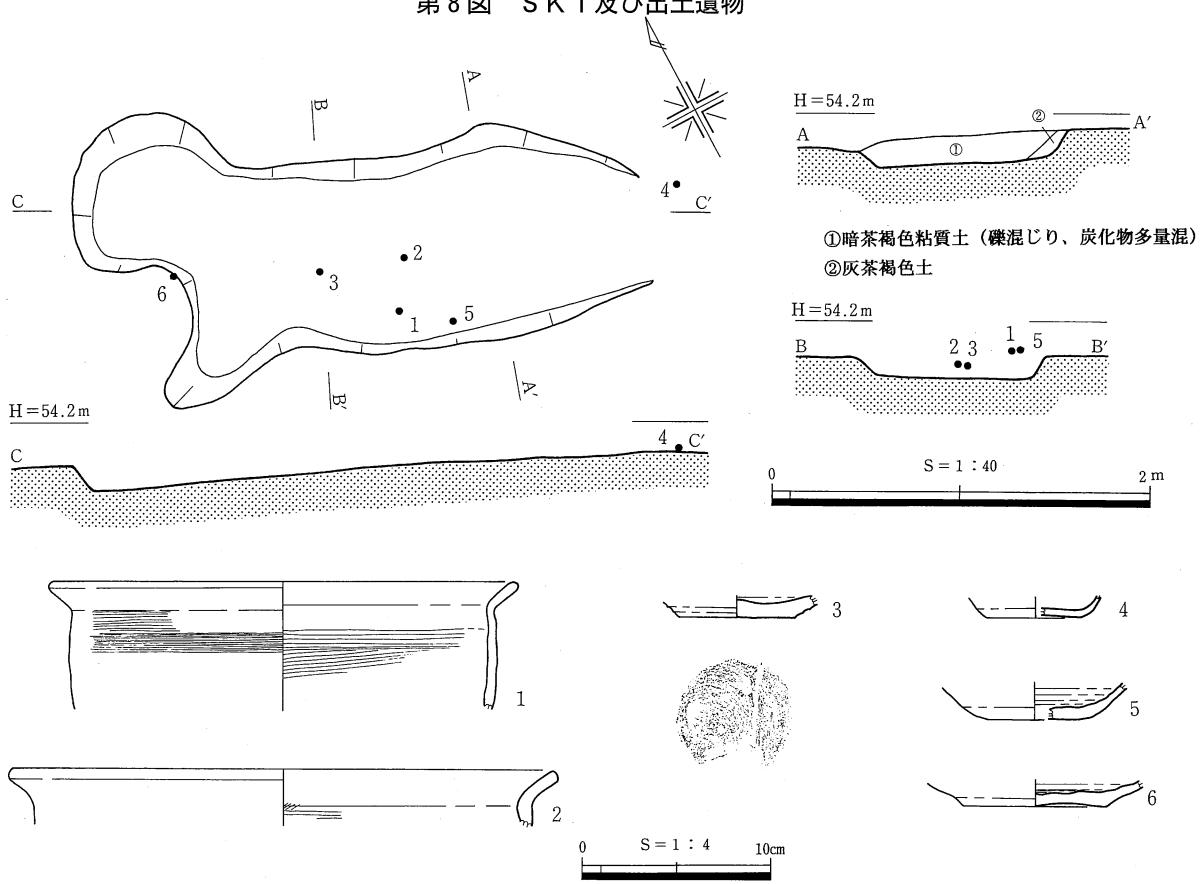
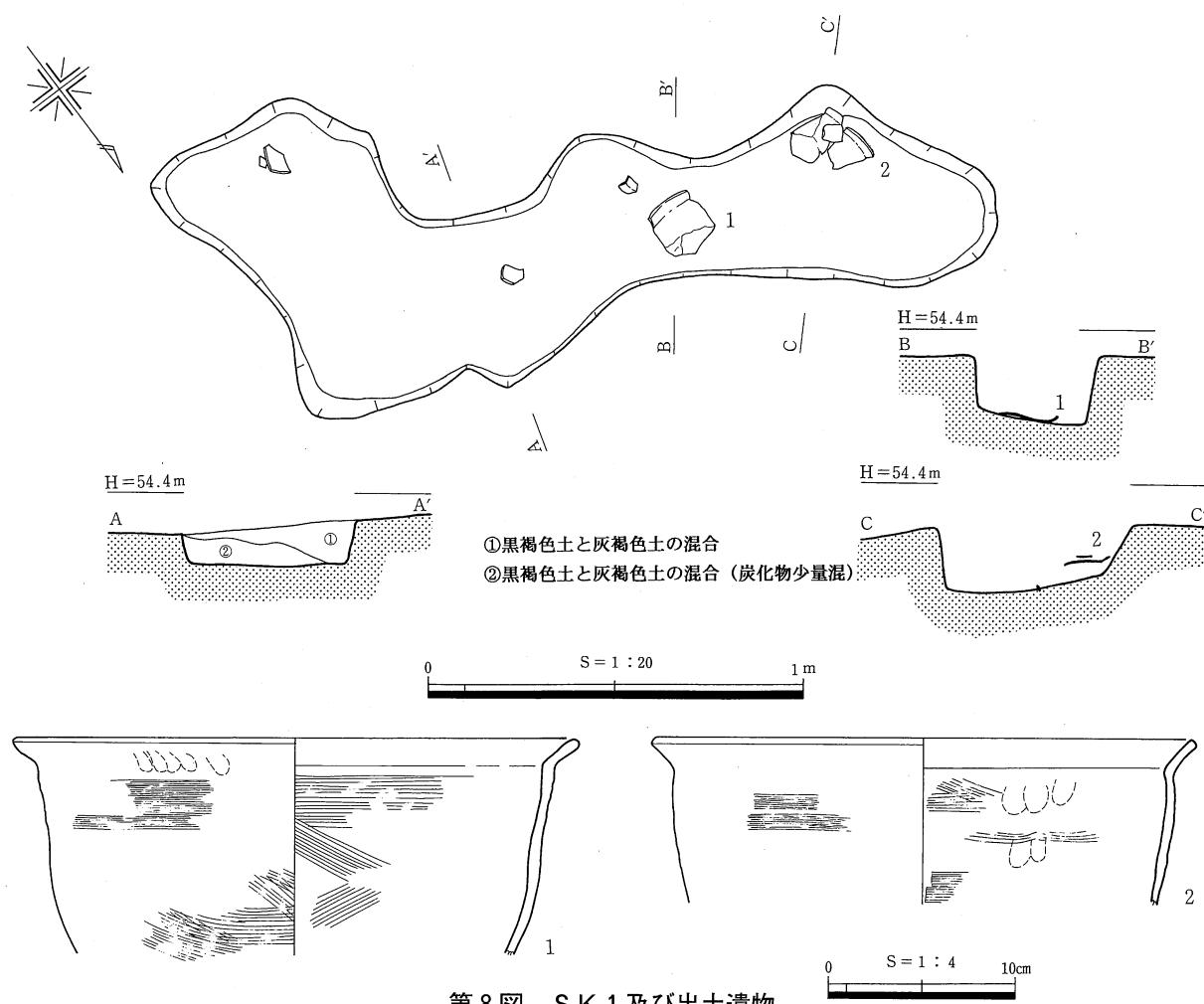
D 3 グリッドの南側に位置する。ほぼ東西方向に長軸を持つ、不整形な土坑である。規模は長さ約3m、幅約1m、深さは15cm前後を測る。埋土は小礫と炭化物を多量に混入する暗茶褐色粘質土からなる。遺物は埋土中より土師質土器の皿(3~6)、土鍋(1、2)などが出土している。(1、2) は「く」の字状に屈曲する口縁をもつもので、(1) は内外面とも頸部以下にヨコハケ調整が見られる。(3、6) は体部が直線的に外傾するタイプ、(4、5) は体部が緩やかに立ち上がるタイプのものと思われる。(4~6) は風化が著しく調整不明瞭だが、(3) には糸切り痕が見られる。これらの遺物より、遺構の時期は12世紀と考える。

S K 3 (第10、11図、写真図版4、11)

D 2 グリッド南東隅(一部D 3 グリッドにかかる)に位置する。土坑の南側はS K 6 によって一部切られており、その上層には集石1が位置している。検出段階で失敗し、南側部分と北側部分を別々の土坑として掘り進めてしまったため、土坑の形態が一部不明瞭になってしまった。規模は長さ3.1m、幅約1.5m、土坑の西側で深さ約30cm、東側では15cm前後を測る。西側の壁面が急な角度で掘り込まれているのに対し、西側は底面と壁面との境目もありまいである。南側には不明瞭な段がある。埋土は2層に分けられ、上層が暗茶褐色粘質土、下層が暗灰茶褐色粘質土である。いずれも炭化物と3cm大の礫を混入する。この埋土の中位付近で、土師質土器の皿(1~5)、土鍋(7)、須恵器の片口鉢(6)などの遺物を検出した。土鍋(7)は土坑の中央付近に破片が集中しており、ほぼ一個体に復元することができた。(1~5) は皿で、(1) は内湾気味に緩やかに立ち上がる体部、(2、3、4) は直線的に外傾する体部をもつ。(5) は底径が小さく、体部は中位でやや内湾気味に屈曲する。(1、2) は明瞭な糸切り痕を残す。風化が著しいが(3~5)も底部は糸切りによる切り離し痕が見て取れた。(6) はやや内湾気味に立ち上がる体部を持ち、口縁端部は水平に面取りされている。底部付近の外面には、指で体部を撫で上げたような痕跡がわずかに見られる。(7) は「く」の字状に屈曲する口縁を持つ。わずかに肩部が張り、全体に丸みをもったプロポーションで、底部は非常に緩いカーブを描く。内外面とも頸部から肩部にかけてヨコハケ、肩部以下にはナナメハケ、ヨコハケ調整が施されている。内面肩部には指頭圧痕が見える。遺構の時期は、これらの遺物より12世紀と考える。

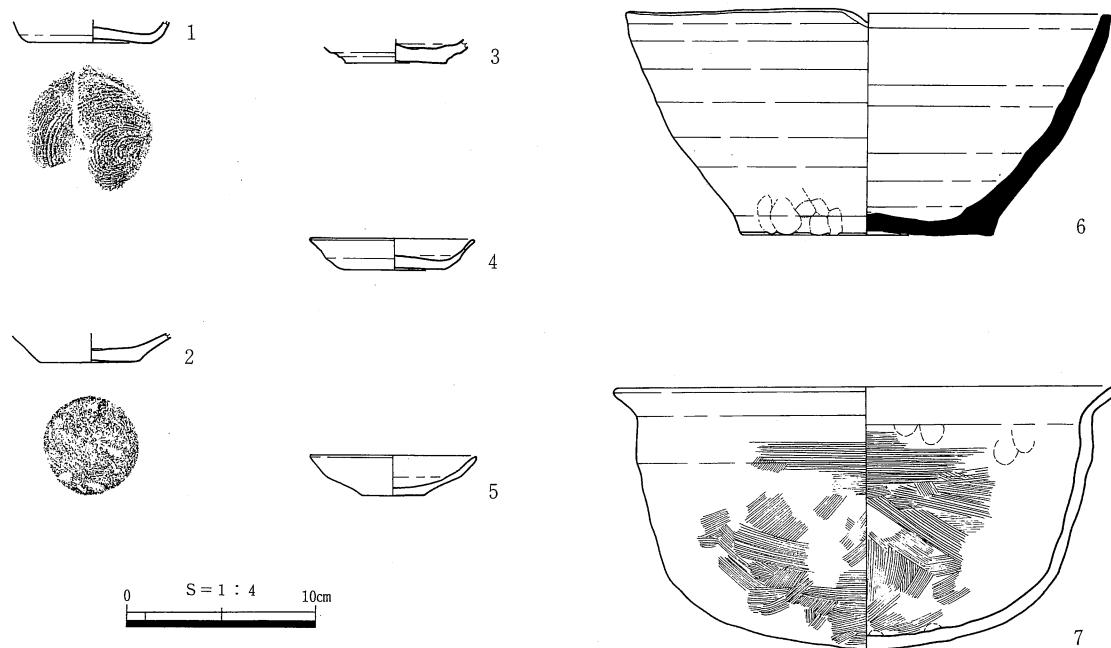
S K 4 (第12図、写真図版5、11)

C 5 から D 5 グリッドにかけて位置する。平面形は歪んだ円形を呈し、南側、東側、西側にそれぞれテラス状の段を有する。規模は長軸2.4m、短軸2m、深さは最深部で40cmを測る。黒茶褐色系の埋土からなり、底面付近には礫が少量混入している。埋土中から土師質土器の破片が多数出土したが、図化できたものは土師質土器の皿(1)、土鍋(2)にとどまった。(1) は皿の底部だが風化が著しく調整は不明瞭である。(2) は「く」の字状に屈曲する土鍋の口縁である。口縁部の屈曲は比較的緩やかで、肩部がわずかに張り出す。風化が著しいが、

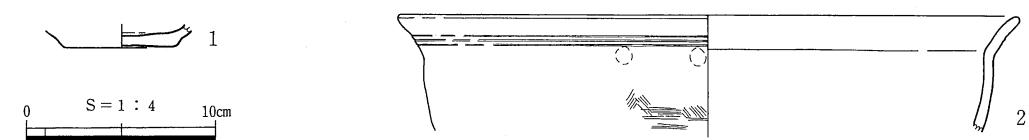
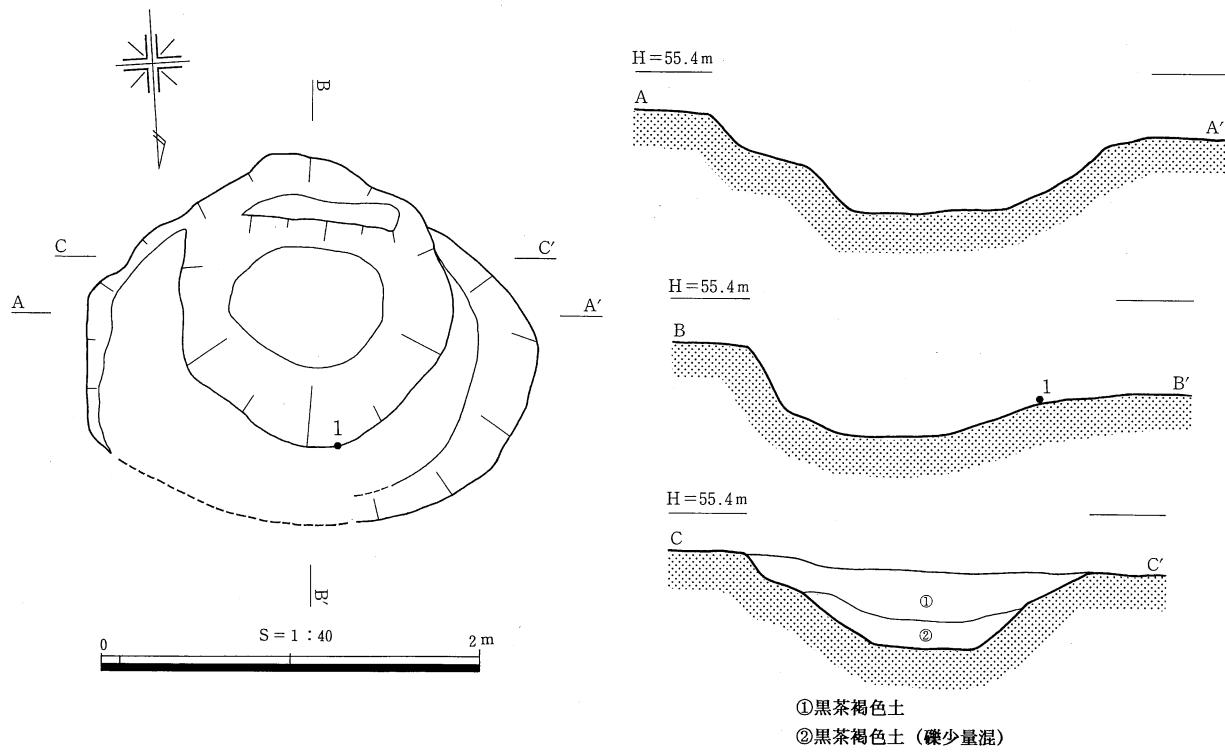




第10図 SK 3



第11図 SK 3 出土遺物



第12図 SK 4 及び出土遺物

外面頸部にヨコハケと指頭圧痕、胴部付近にもハケメが見える。出土遺物から、遺構の時期は12世紀と考える。

S K 5 (第13図、写真図版5、11)

D 6 グリッド南東に位置する。検出に失敗し、上面を全体に5cmばかり削平してしまったが、基本的に楕円形を呈する土坑である。規模は長さ87cm、幅48cm、深さは10cm弱である。埋土は暗茶褐色土に黒色炭化物が濃密に混じる上層と、炭化物がやや少なくなる下層の2層に分けられる。遺物はわずかに糸切り痕の残る土師質土器の皿底部(1)が出土している。遺構の時期は、出土遺物より12世紀と考える。

S K 6 (第14図、写真図版5)

C 2 から D 2 グリッドにかけて位置する。南北方向に長軸を持つ、細長い楕円形を呈する土坑である。北側の端は S K 3 の肩を切っており、西側の上層には集石1が位置している。規模は長さ2.1m、幅4.5m前後を測り、深さは北側で15cm、南側で6cmと全体に南から北側に向かって緩やかに傾斜している。埋土は小礫、炭化物を混入する暗茶褐色粘質土の单層からなる。遺物は出土しなかった。時期は、S K 3 を切って構築されていることから、12世紀以降と考える。

第3節 溝状遺構

S D 1 (第15図、写真図版6、11、12)

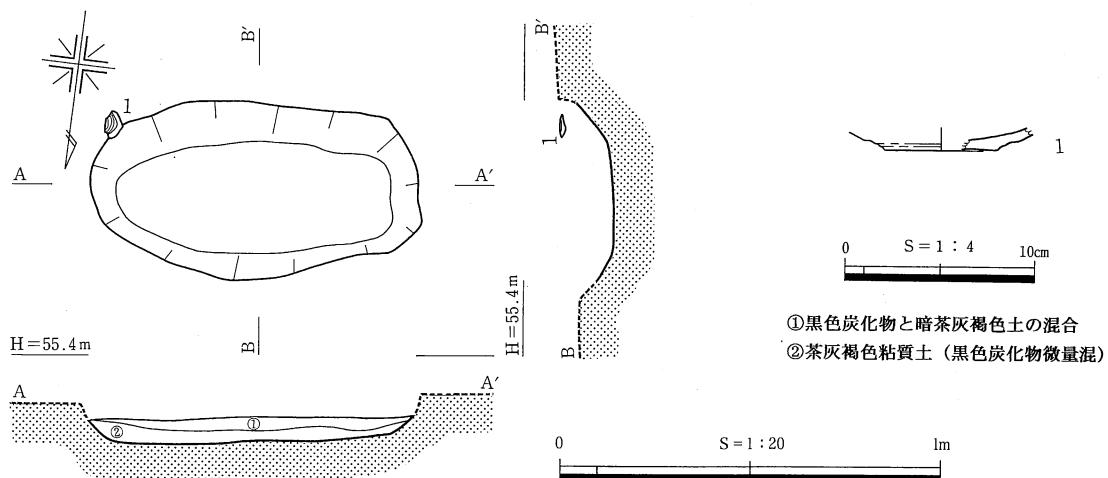
C 4 ~ C 5 グリッドにかけて位置する。東西方向に7.2mにわたって延びている。中央付近では、やや南側に蛇行している。壁面と底面の境目はあいまいで、断面形は浅い皿状である。幅は中央部の最も広いところで1.2m、東西の両端部分で50cm前後を測る。深さは東側で15cm前後、西側で20cm前後であり、緩やかに東から西へ傾斜している。また、南側の検出面の標高が54.9m前後なのに対し、北側のレベルは54.7m前後であり、南から北側へ向かっても傾斜が認められる。埋土は小礫を含む黒茶褐色土の单層である。埋土中より白磁碗(1、2)土師質の土鍋(3、4)が出土している。(1)は大きな玉縁口縁で、内面に沈線状の段を有する碗である。口縁部は釉が垂下している部分もある。(2)は小さな玉縁口縁を有する。(1)は太宰府分類IV類、(2)はII-1類に相当する。(3、4)は「く」の字状に屈曲する口縁を持つ。(3)はやや風化しているが、内外面にハケメが見られる。(4)は、内外面とも頸部から肩部にかけてヨコハケ、肩部以下は外面ナナメハケ、内面ヨコハケの調整が施されている。遺構の時期は出土した白磁碗から、11世紀後半から12世紀前半と考える。

S D 2 (第16図、写真図版6、12)

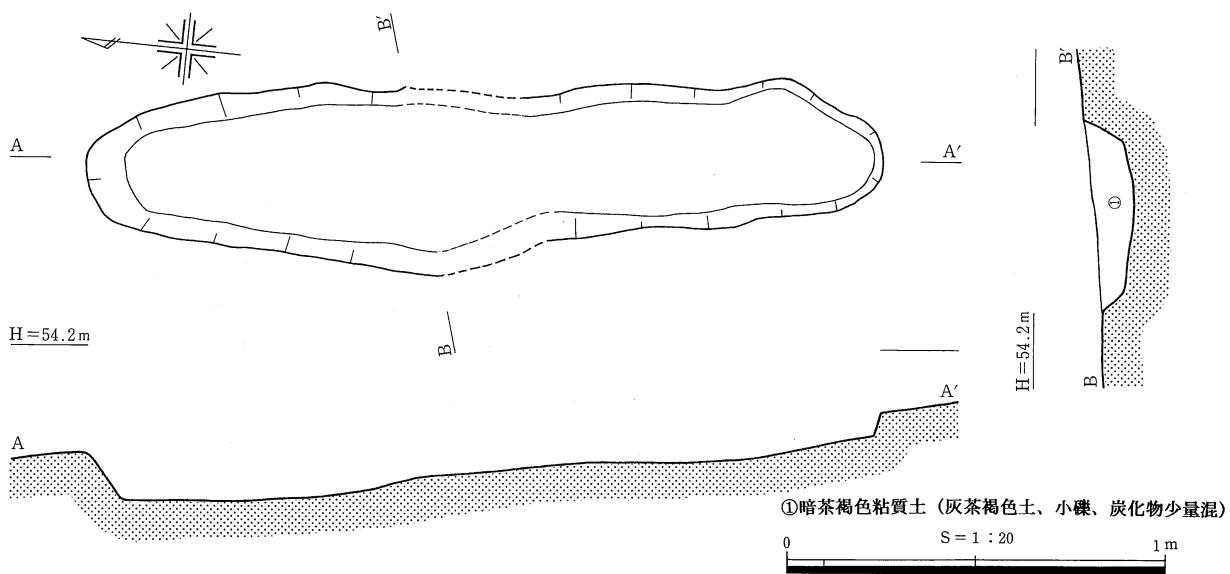
C 4 グリッド北西隅(一部D 4 グリッドにかかる)に位置する。ほぼ東西方向に4.5mにわたり延びる。最大幅90cm、西側の端で幅30cm前後、断面は逆台形を呈し、深さは東側で20cm前後、西側で15cm前後である。底面、検出面とも、西から東へ向かって緩やかに傾斜している。埋土は小礫混じりの黒茶褐色土の单層である。遺物は埋土上層より、土師質の土鍋(1)を検出した。「く」の字状に屈曲する口縁で、体部は丸みを持つ。内外面とも肩部にヨコハケ、肩部以下はヨコハケのほか斜め方向のハケメが施される。また内面は頸部から肩部にかけてと底部付近に指頭圧痕が見える。遺構の時期は土鍋の形態から、12世紀と考える。

S D 3 (第17図、写真図版7)

D 4 グリッド南東隅からC 6 グリッド北西にかけて位置する溝状遺構である。長さは17m、幅は西端で約50cm東端で約3mであり、直線的に延びながら西から東に向かい幅を大きく広げて途切れる。断面は逆台形を呈し、東側では壁面の傾斜は緩やかであるが、西側では非常に急である。東側の底面レベルは55.2m前後、西側が55.3m前後であり、西から東へ向かって緩やかに傾斜している。遺物としては土師質土器の小片を検出しているが図化できなかった。遺構の時期は不明である。



第13図 SK 5 及び出土遺構

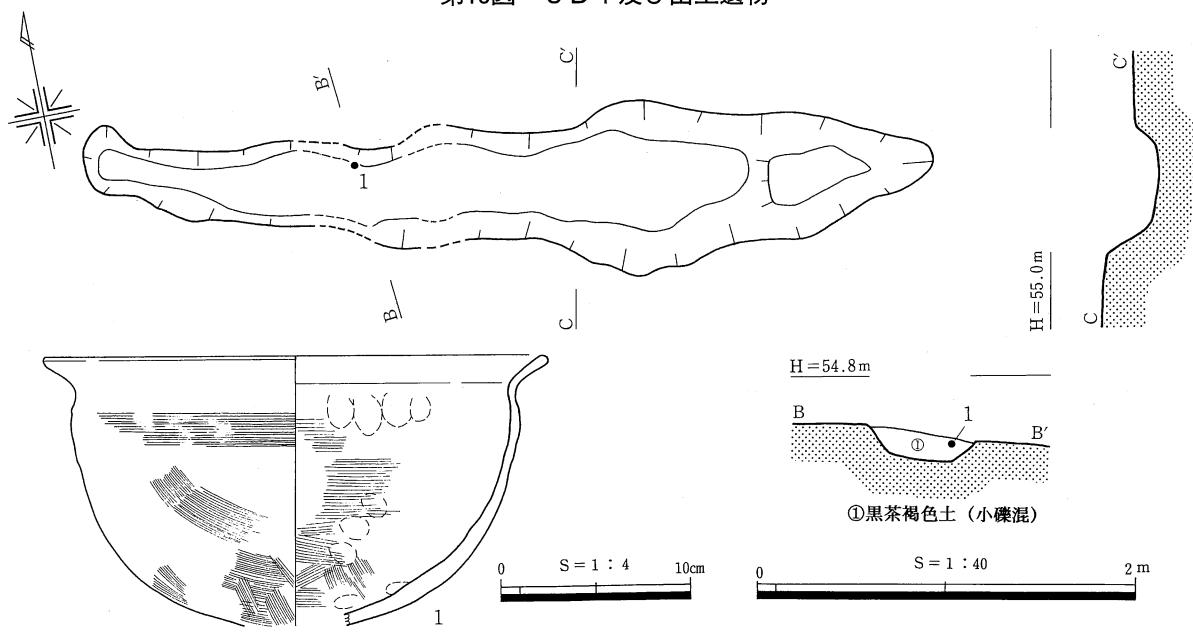
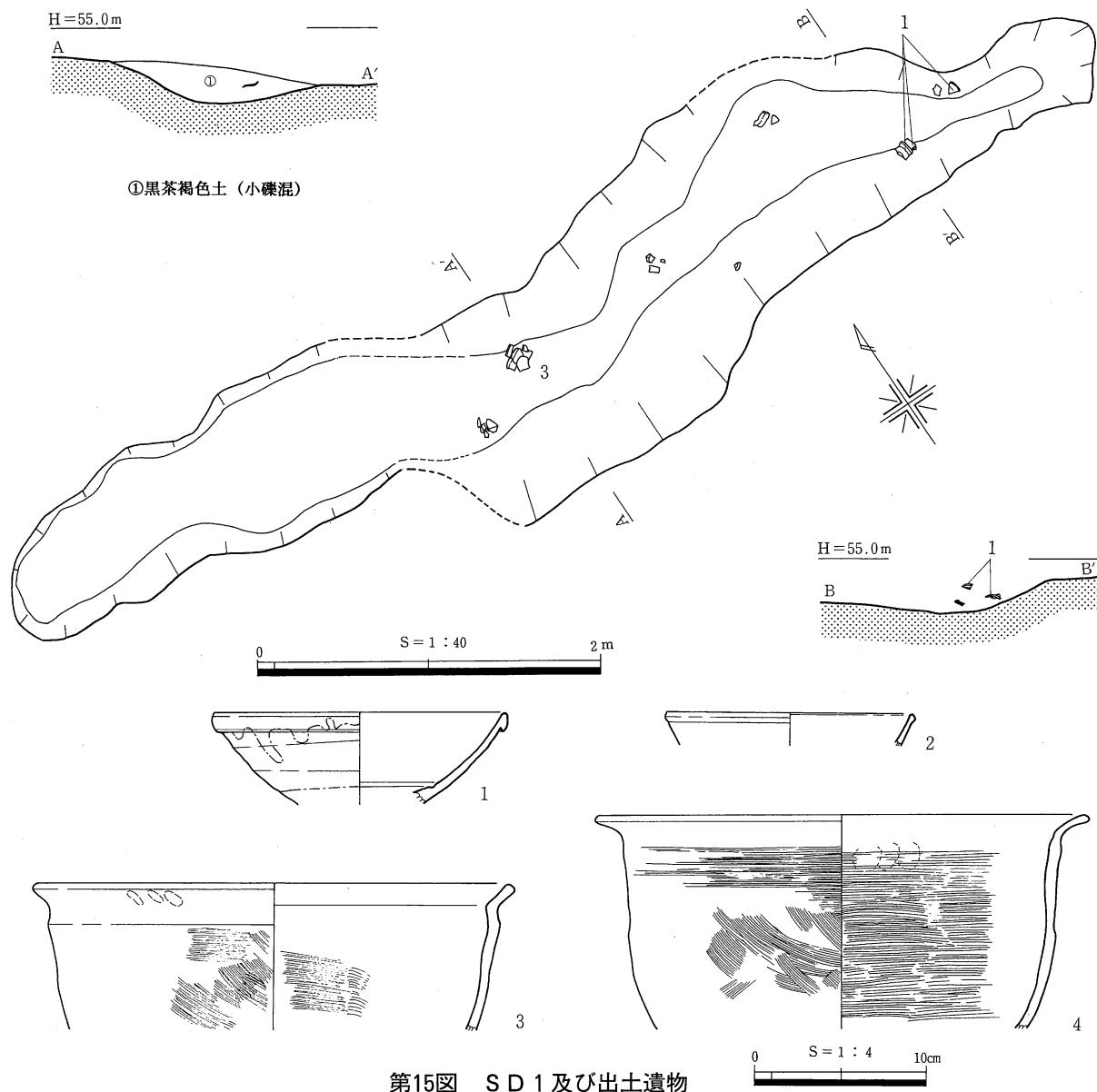


第14図 SK 6

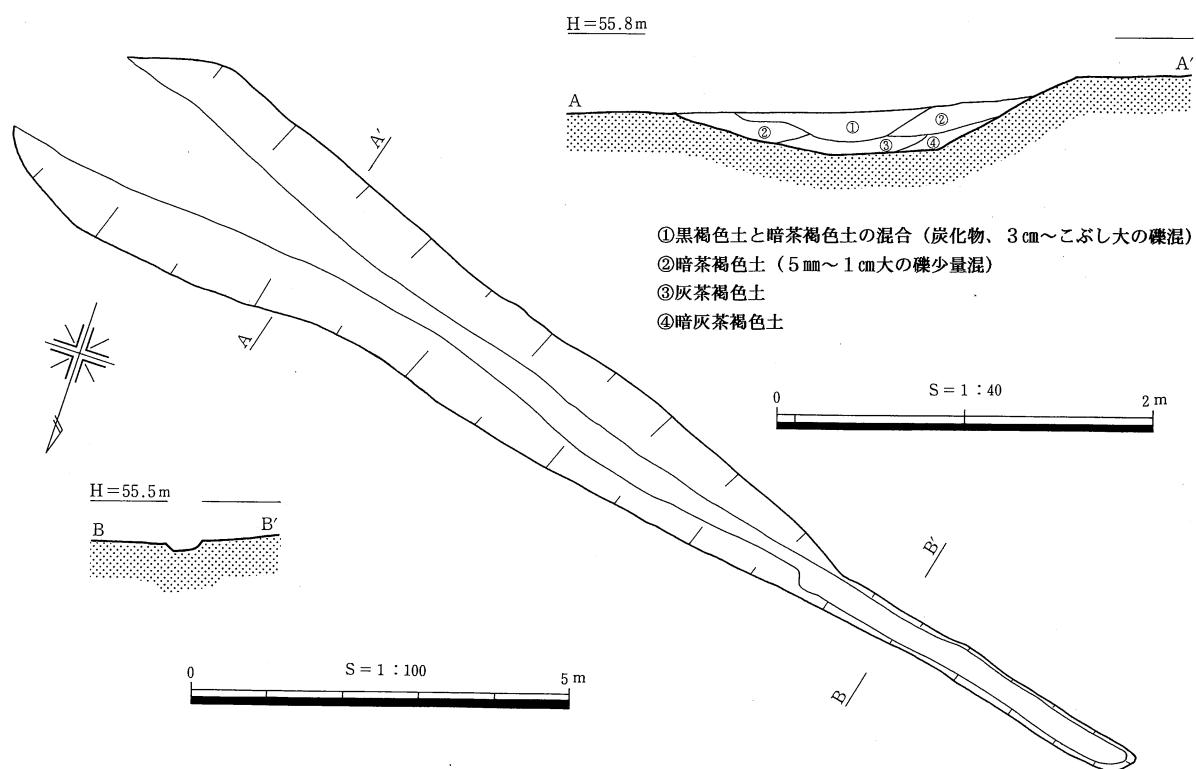
第4節 テラス状遺構

SS 1 (第18図、写真図版7)

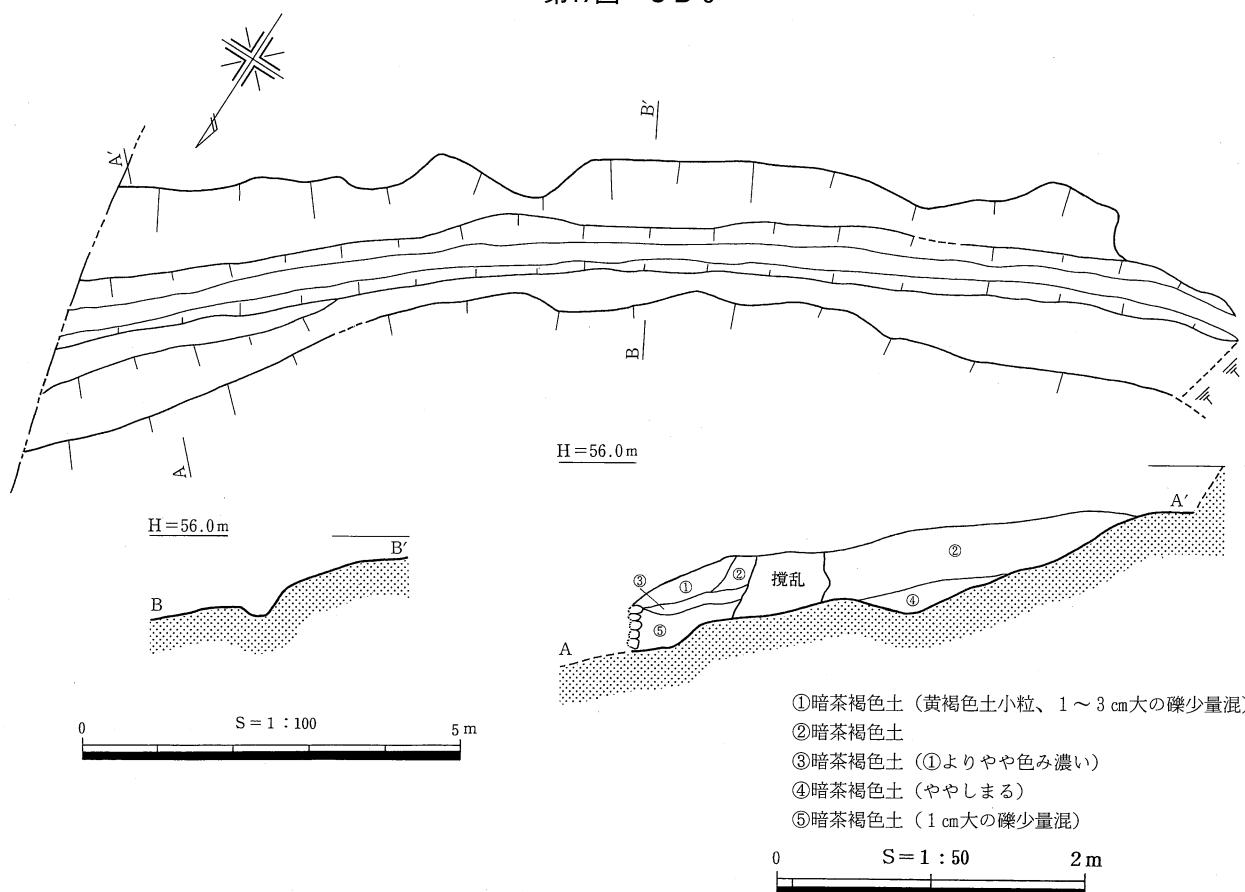
D 7 グリッド北東隅から E 7、E 8 グリッドにかけて位置する。斜面を掘削し、わずかな平坦面を造成したものの、壁面裾には断面逆台形状の溝が伴う。東側は調査区外に続いているため全貌は明らかでないが、検出した範囲内での規模は、長さ15.5m、平坦面の幅80cm前後、後背壁面の高さ約80cm、溝の底面幅約30cm、深さ20cm前後を測る。埋土はローリングを受けた土師質土器の小片を多量に含む暗茶褐色土である。直接遺構の時期を示すと思われる遺物は検出できなかった。



第16図 SD 2 及び出土遺物



第17図 S D 3



第18図 S S 1

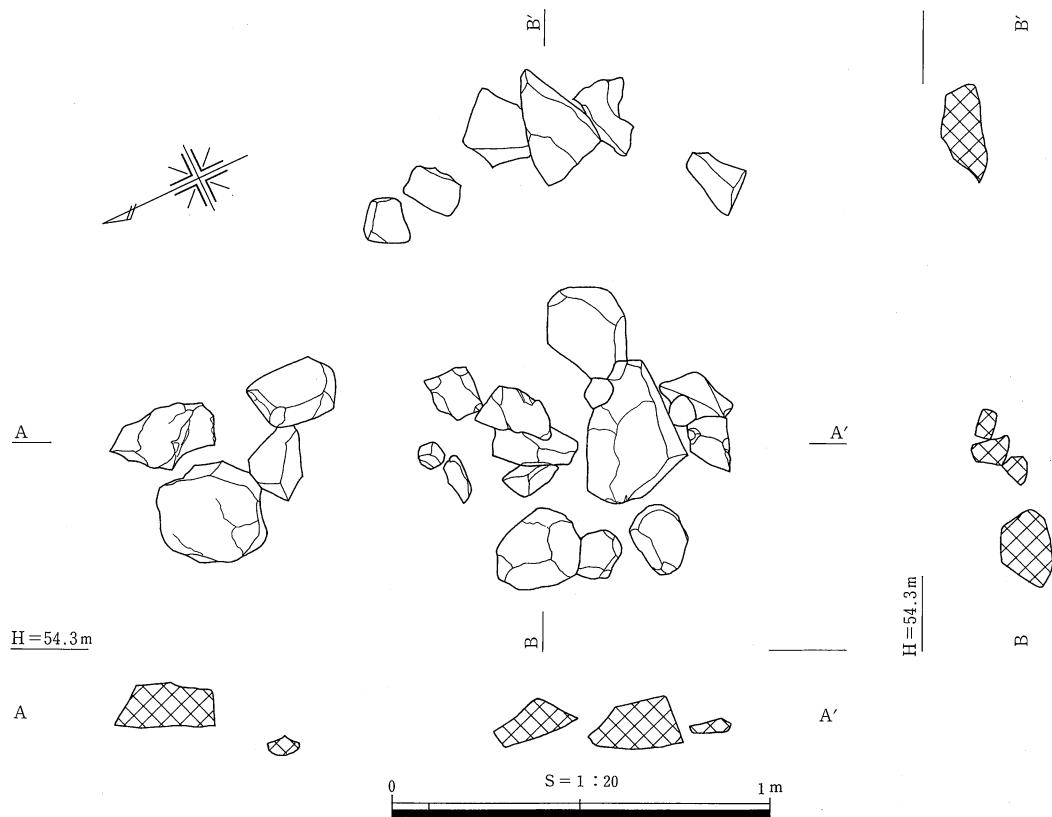
第5節 集石

集石1 (第19図、写真図版8)

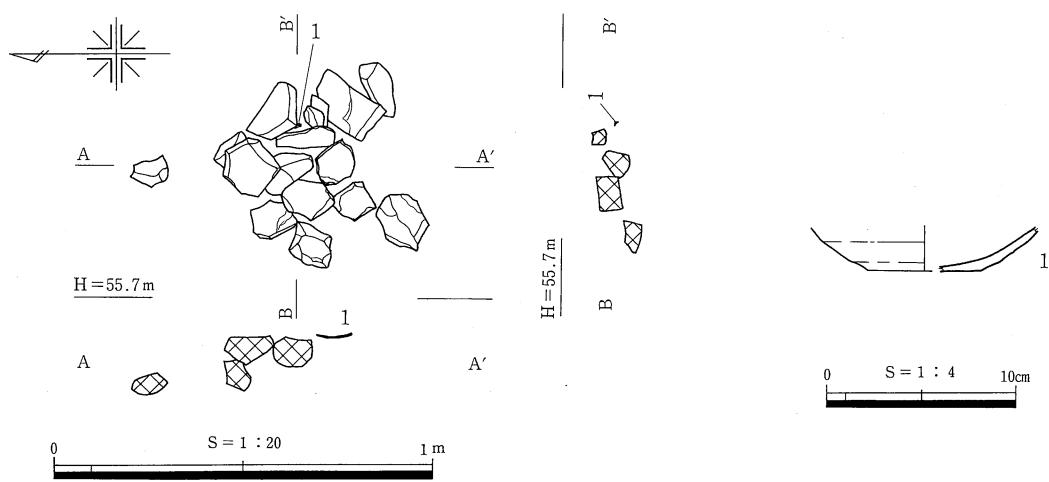
C 2～D 2 グリッドの間、SK 3、SK 6 の上層に位置する。南北1.8m、東西1.6mほどの範囲に20～30cm大の自然礫を集積したものである。検出レベルは標高54m前後である。遺物は出土していない。

集石2 (第20図、写真図版8、11)

D 7 グリッド南西に位置する。東西60cm、南北80cmほどの範囲にこぶし大の礫を集積したものである。検出レベルは標高55.5m前後である。集石の中央付近から土師質土器の胴部片、集石東側の下層より土師質土器の底部(1)を検出している。底径は小さく、内湾気味に立ち上がる体部を持つ。



第19図 集石1



第20図 集石2 及び出土遺物

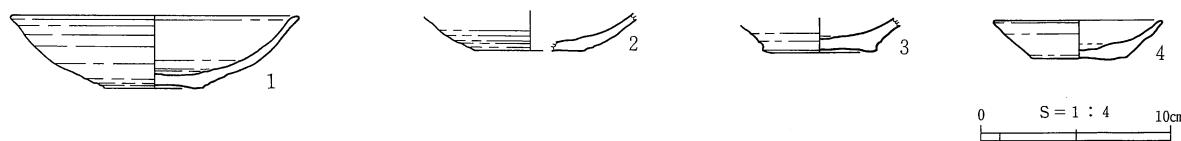
第6節 石列

石列（第22図、写真図版8）

C 7 グリッド北西からD 7 グリッド西側にかけて位置する。約10mにわたってほぼ南北に延びる。検出レベルは、石列の東側が標高55.5m前後、西側は55.3m前後である。20~30cm大の礫を二段に積み重ね一列に並べたものである。礫は大きさこそほぼ揃えられているものの、その形状は角礫であったり円礫であったりと統一性は感じられない。中央付近は下部に大きめの礫を選び、上下の礫の平坦面を揃えて丁寧に積んであるが、北端付近では一段のみの部分もあり、南端付近の上段は小礫を無造作に積み上げたような粗雑な印象を受ける。石列の東側が地形的にやや高くなっていることから、石垣としての機能を考えられる。また石列は小さな谷地形の斜面に沿っており、調査中も石列の西側の裾は山から染み出る水が絶えず流れ続けていたので、このような地形を利用した水路の護岸壁として築かれた可能性もある。石列の時期を決定する遺物は出土しなかった。

第7節 ピット内出土遺物（第21図、写真図版12）

佐貫上台遺跡では、ピットを26基検出した。ピットはA 5~A 6 グリッド、D 5 グリッド、E 7 グリッド付近に集中して存在するが、各ピットの位置関係に規則性は見出せなかった。P 3、P 6、P 24の埋土中からは遺物（1~4）が出土している。P 3 から出土した（1、2）は土師質土器の皿である。いずれも風化が著しいが、底部にはわずかに糸切り痕が見られる。調整は内外面とも回転ヨコナデである。P 6 から出土した（3）は土師質土器の底部で底部にかすかに糸切り痕が認められる。底部の切り離しは粗雑である。P 24 から出土した（4）は土師質土器の皿である。器壁は比較的厚く、内外面ともヨコナデ調整が施されている。底部には糸切り痕が見える。いずれも12世紀の遺物と考える。

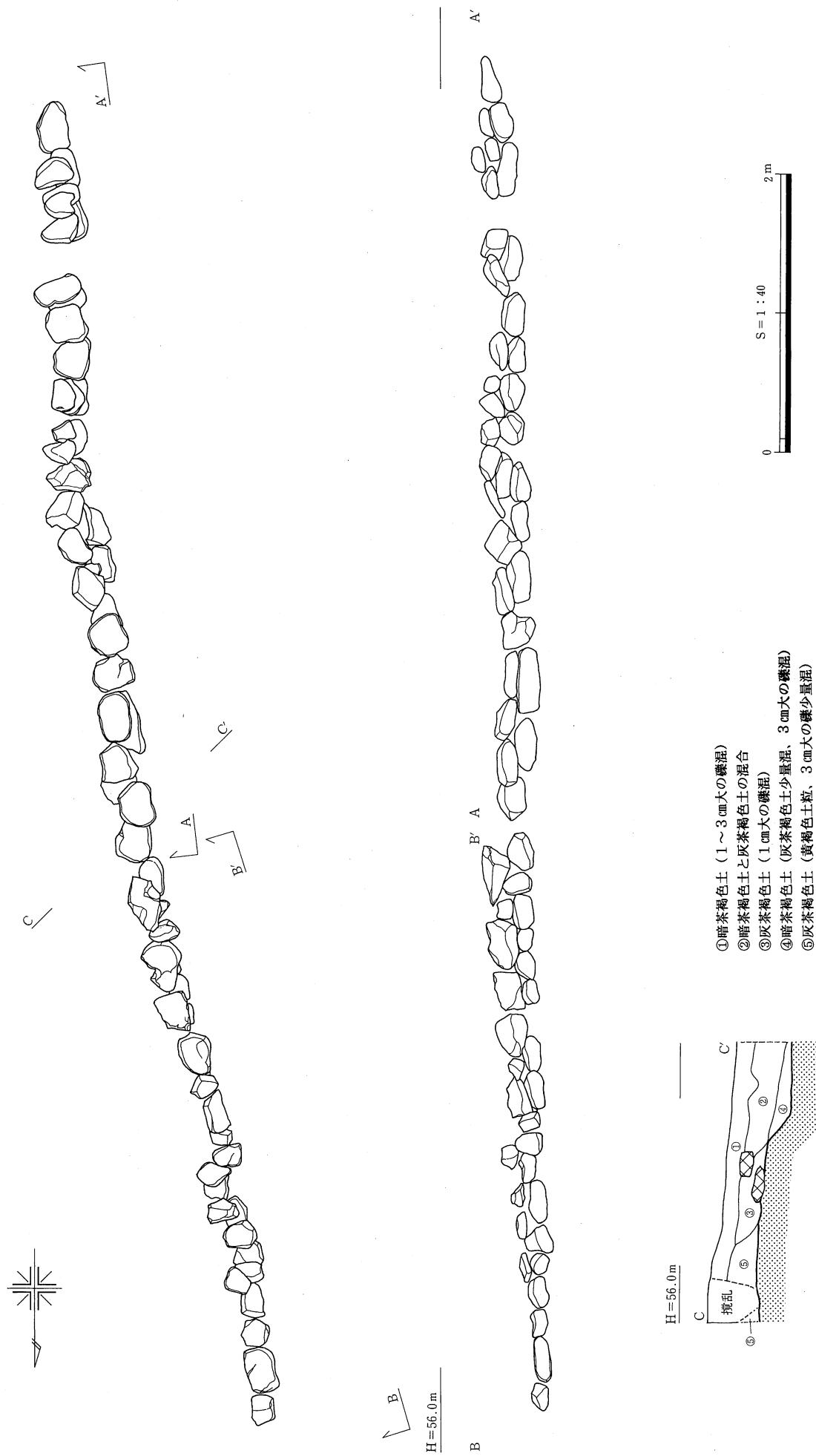


第21図 ピット内出土遺物

表2 ピット一覧表

()内の数値は復元値

ピット名	規模(径×深さ)cm	遺物	ピット名	規模(径×深さ)cm	遺物	ピット名	規模(径×深さ)cm	遺物
P 1	35-14		P 11	35-33		P 21	30-37	
P 2	24-23		P 12	(35)-30		P 22	35-28	
P 3	20-22	1、2	P 13	(38)-30	土師破片	P 23	32-25	
P 4	28-6		P 14	38×42-55	土師破片	P 24	34-16	4
P 5	30×19-20		P 15	30-31		P 25	36×24-26	
P 6	24-24	3	P 16	30-26				
P 7	42-27		P 17	(28)-35				
P 8	22×26-23		P 18	(31)-48				
P 9	24×21		P 19	33-19				
P 10	30×41		P 20	46-26				



第22図 石列

第8節 遺構外出土遺物（第23～25図、写真図版12～15）

遺構に伴わない遺物としては、遺構の時期と前後する中世の遺物を多量に検出している。これらは調査区内の北側区域に広がる、中世から近世、近代に至る土師質土器、陶磁器片を含む遺物包含層（第7図・⑤層）およびその下層の中世の遺物を多量に含む遺物包含層（第7図・⑦、⑧層）から検出されたものである。

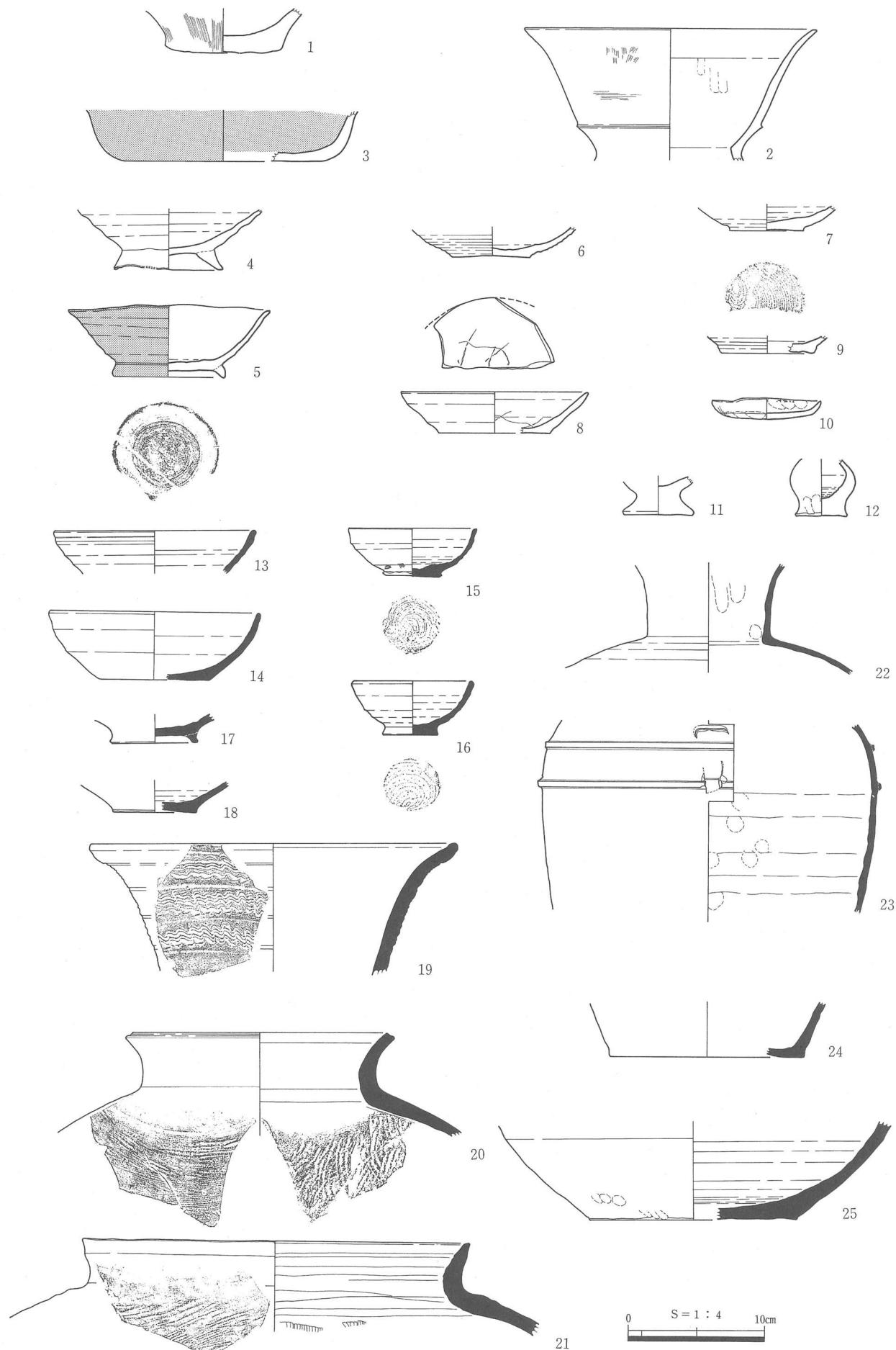
(1) は弥生土器と思われる底部である。(2) は鼓形器台の受部である。(3) は内外面とも赤色塗彩された土師器の皿である。奈良時代のものか。(4～12) は土師質土器である。(4、5) は「ハ」の字状に開く貼付高台を持つ壺で、底部から口縁部に向かい直線的に開く形態をとり、(5) は高台内部に糸切り痕が残る。調整は内外面とも回転ヨコナデである。11世紀頃のものと考える。(6、7、9) は底部である。風化が著しいがいずれも底部に糸切り痕が確認できる。(8) は皿である。底部から口縁まで直線的に伸びる形態をとり、底部には糸切り痕が残る。また内面にはヘラ記号的な工具痕が認められる。(10) は小皿で、口縁部および底部に指押さえの痕跡がわずかに見られる。(11) は柱状高台、(12) はミニチュア壺である。(12) は回転台整形で、底部のくびれを指押さえで調整した痕跡が見える。(6～9、11) は12世紀、(10) が13世紀のものと考える。

(13～25) は須恵器である。(13～18) は須恵器の壺・椀である。(17) は「ハ」の字状に開く高台部で、高台内部は糸切り後ナデを施している。(18) は底部に糸切り痕が見られ、その痕跡のうえに幅7mm程のハケ状工具の跡が見える。切り離しは粗雑である。(15、16) は小型の椀である。比較的器壁が厚く、底部の切り離しも雑である。底部には糸切り痕が残る。12世紀後半から13世紀前半のものと考える。(19～21) は大甕の口縁部である。(19) は大きく外反する頸部を持ち、口縁部は受け口気味になる。外面は沈線で区画された文様帶に波状文による装飾が施される。(20) は頸部が外反し、口縁端部は平坦である。口頸部は回転ヨコナデ、肩部は外面に横方向のタタキ、内面に同心円文タタキが認められる。(21) の口頸部はやや直立気味である。口縁端部にむかって器壁の厚みはなくなり、先細った口縁端部は丸く収められる。口頸部は内外面ともヨコナデ調整され、肩部は外面に右上がりの粗いタタキ、内面に縦方向のハケメが認められる。(21) は中世のものと考えられる。(22～24) は壺である。一ヶ所でまとまって出土したもので、頸部から肩部、胴部、底部は接合できなかったが同一個体の可能性がある。(22) はやや外反気味にのびる頸部で、内外面ともナデ調整、頸部内面には指押さえ痕が見られる。胴部(23) には2条の貼付突帯が巡り、2条の突帯の上には、本来耳がついていたものと考えられる。底部(24) は平底で、胴部から底部は内外面ともヨコナデ、内面には指押さえの跡も残る。(22～24) は12世紀頃のものと考える。(25) は捏ね鉢の底部である。胴部がやや内湾気味に立ち上がるもので、比較的大型である。(28～35) は須恵器甕の胴部片である。(32～35) は外面に格子目タタキを施した胴部片で、亀山・勝間田系のものと思われる。(33、35) は淡灰茶褐色を呈し、焼きの悪さが目に付く。(26、27) は平瓦である。凹面には布目が見られる。

(36) は緑釉陶器の椀である。「ハ」の字状に開く高台は内側にやや突出し、体部は緩やかに内湾するカーブを描く。外面は高台部分まで施釉され、高台内部は露胎している。淡緑灰色を呈し、内外面に貫入も見られる。京都洛西産のもので、9世紀後半から10世紀前半のものと考える。

(37～40、44～50) は白磁である。(37) は小さな玉縁口縁で、太宰府分類の椀II-1類にあたる。(38、39) は大きな玉縁口縁をもつ椀IV類。(40) は直線的な体部を持つ椀V-2類である。(44) は椀II類の底部で、底部外面および高台部は露胎している。(45～50) は白磁皿である。(47、48) は太宰府分類の皿VI-1類、(45、46) は内面見込み部に沈線花文を施す皿VIまたはVII類、(49) は皿VI-2 b類、(50) は内面に草花文を施す皿VIII-1 b類である。(37～40、44～49) は11世紀後半から12世紀前半、(50) は12世紀中頃から後半のものである。

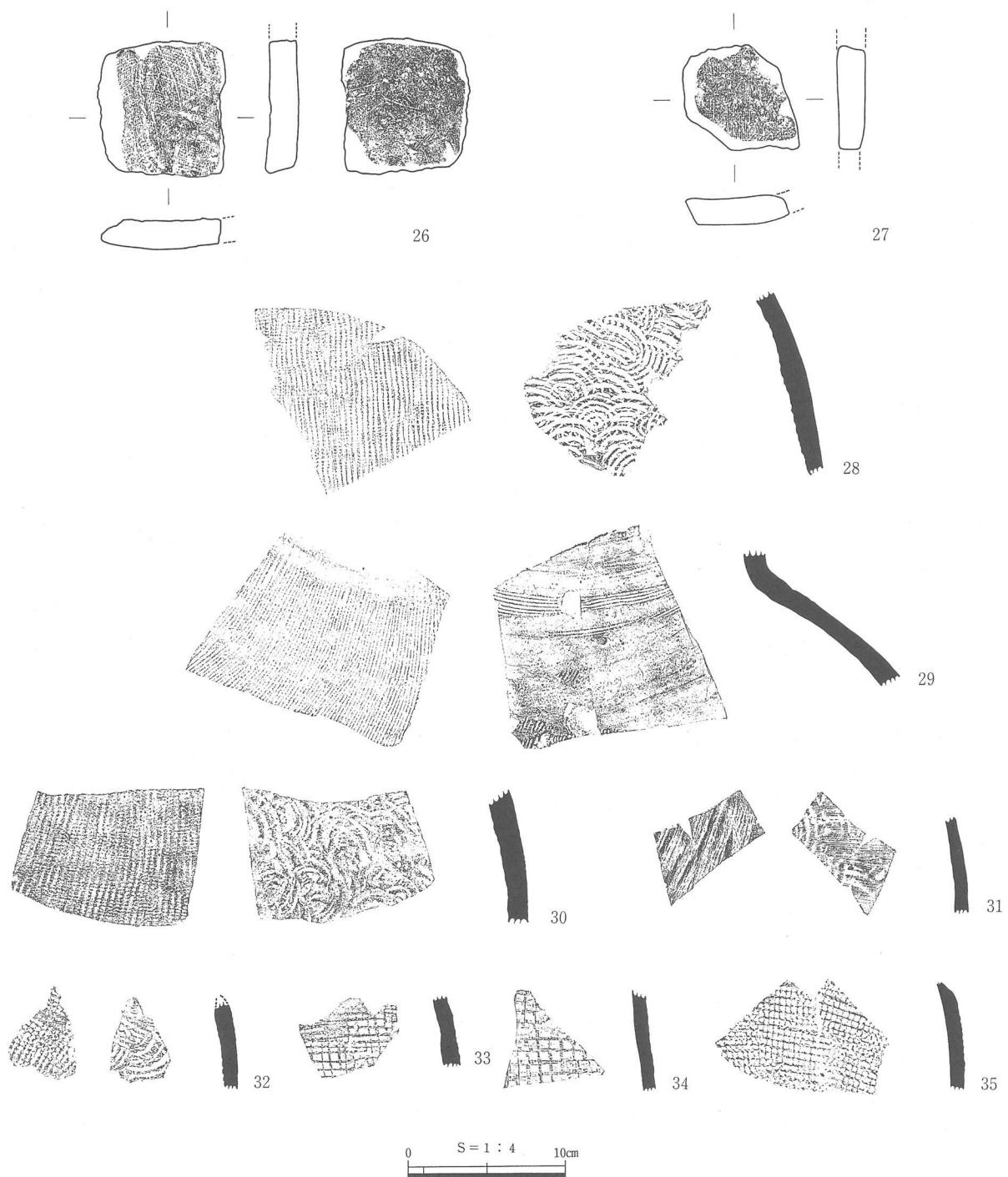
(41、42) は青磁である。(41) は龍泉窯系の椀IV類で、外面に蓮弁文を有し、青緑灰色を呈する。14世紀前半のものである。(42) は龍泉窯系の椀III-2類で、(41) に比べシャープな蓮弁文をもつ。13世紀後半のものである。(43) は陶器で、高台部全面に釉がかかるものである。発色は黄褐色である。近世のものか。



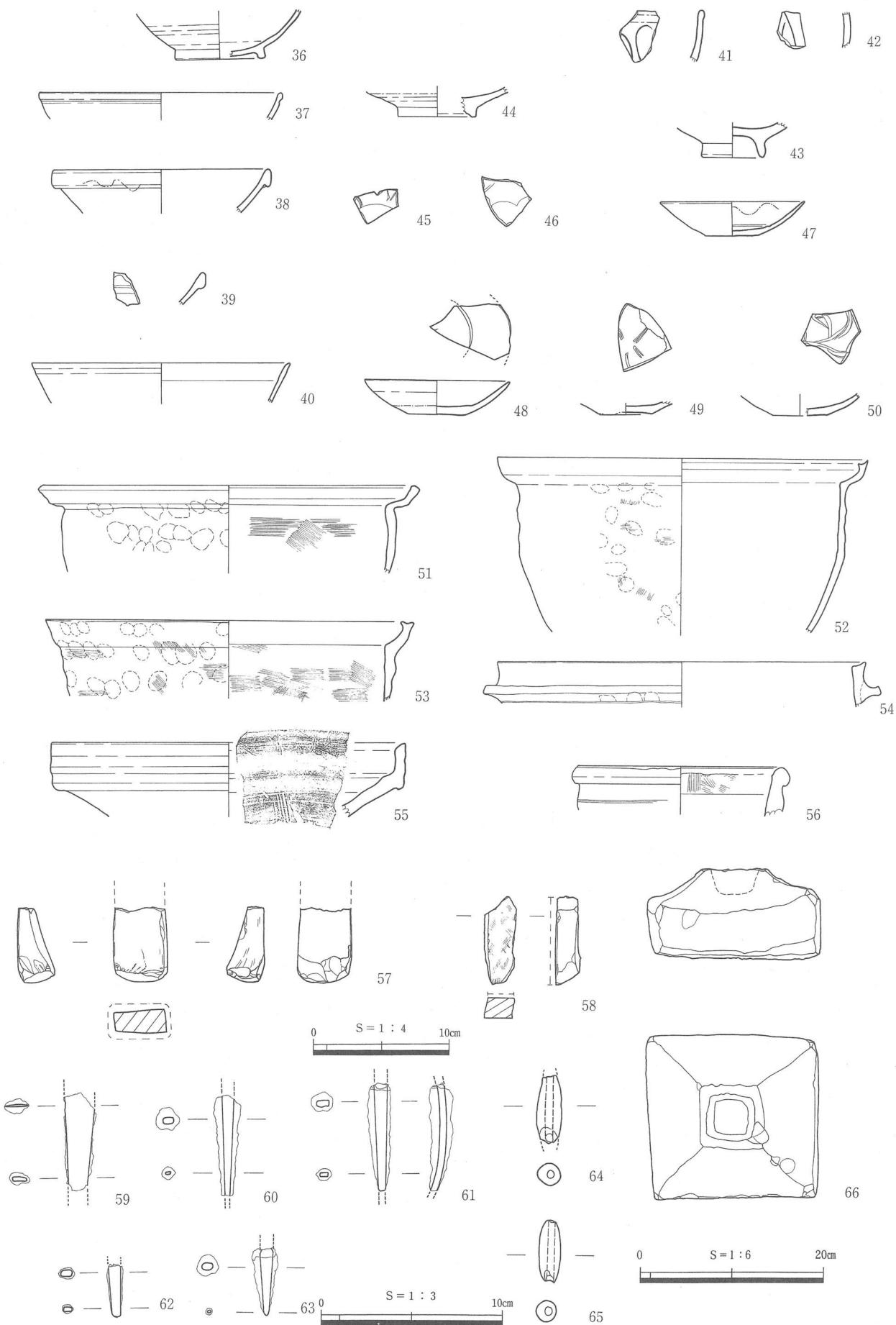
第23図 遺構外出土遺物（1）

(51～53) は受け口の口縁部を持つ瓦質土器の鍋である。(51～53) の外面には指頭圧痕が段状に多数残り、内面はハケメ調整が施されている。(54) は羽釜である。鍔を貼りつけた時のものと思われる指頭圧痕が外面鍔下部に残る。13世紀後半から14世紀のものと考えられる。(55) は備前焼の擂鉢で、口縁部が上下に拡張されるものである。(56) は備前焼の甕口縁である。

(57、58) は砥石である。(59～63) は鉄器である。(59) は鉈と思われるもので、(60～63) は釘であろうか。いずれも鋸の付着が著しい。(64、65) は土錘である。(66) は五輪塔の火輪である。



第24図 遺構外出土遺物（2）



第25図 遺構外出土遺物（3）

(*…復元値、▲…遺存値)

遺構名	遺物番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底部径(cm)	手法上の特徴	焼成	色調	備考	実測者No.	取上げNo.
SK 1	1	土鍋	*30.0	▲11.6		内外面肩部ヨコハケ、肩部以下ハケメ	良好	淡黄褐色		山本ひ7	289,217
SK 1	2	土鍋	*29.0	▲8.9		内外面ヨコハケ、肩部内面に指頭圧痕	良好	淡黄褐色		山本ひ8	230
SK 2	1	土鍋	*24.7	▲6.8		内外面ヨコハケ	良好	淡黄褐色	外面煤付着	山本ひ6	300
SK 2	2	土鍋	*28.4	▲3.0		内面ヨコハケ	良好	淡黄褐色	風化著しい	表16	304
SK 2	3	土師質土器・底部		▲0.8	5.7	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	淡橙褐色		表15	306
SK 2	4	土師質土器・皿		▲1.1	5.0	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	淡黄褐色		表12	315
SK 2	5	土師質土器・皿		▲1.7	*7.4	内外面ヨコナデ	良好	淡橙褐色	風化著しい	表14	299
SK 2	6	土師質土器・底部		▲1.1	*7.6	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	淡橙褐色		表13	312
SK 3	1	土師質土器・皿		▲1.1	6.5	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	淡橙褐色		表8	287
SK 3	2	土師質土器・皿		▲1.4	5.2	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	淡橙褐色		表3	338
SK 3	3	土師質土器・皿		▲0.8	*5.4	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	淡橙褐色		表5	343
SK 3	4	土師質土器・皿		▲1.7	*5.8	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	淡黄褐色		表9	294
SK 3	5	土師質土器・皿		▲2.14	*3.4	内外面ヨコナデ	良好	淡橙褐色	風化著しい	表6	341
SK 3	6	須恵器・片口鉢	*24.7	11.8		内外面ヨコナデ、外面底部付近指頭圧痕?	良好	青灰色		表18	271,295,336
SK 3	7	土鍋	*26.6	14.0		内外面肩部ヨコハケ、肩部以下ハケメ、内面肩部に指頭圧痕	良好	外面暗茶褐色、内面淡茶褐色	外面煤付着	山本ひ9	296,339
SK 4	1	土師質土器・皿		▲0.9	5.8	内外面ヨコナデ	良好	橙褐色	風化著しい	表4	615
SK 4	2	土鍋	*32.2	▲6.4		外面ヨコハケ	良好	淡茶褐色	外面煤付着	表17	609,617
SK 5	1	土師質土器・皿		▲0.9	*5.9	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	淡橙褐色		表11	455
SD 1	1	白磁碗	*17.2	▲5.4			良好	灰白色	碗IV類	山本ひ10	573
SD 1	2	白磁碗	*14.2	▲1.9			良好	黃白色	碗II-1類	表25	566
SD 1	3	土鍋	*27.9	▲8.6		外面肩部ヨコハケ、頸部指頭圧痕、内外面肩部以下ハケメ	良好	淡茶褐色	外面煤付着	山本ひ4	579
SD 1	4	土鍋	*28.6	▲12.5		外面肩部ヨコハケ、外面肩部以下ハケメ、内面肩部以下ヨコハケ	良好	淡黄褐色	外面煤付着	山本ひ3	634,636
SD 2	1	土鍋	*26.6	▲14.2		内外面肩部ヨコハケ、肩部以下ハケメ、内面肩部、底部に指頭圧痕	良好	外面暗橙褐色、内面淡黄褐色	外面煤付着	山本ひ19	518,520,558
集石2	1	土師質土器・皿		▲2.4	*6.0	内外面ヨコナデ	良好	橙褐色	風化著しい	山本ひ5	496
P 3	1	土師質土器・皿	*15.2	3.8	5.2	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	暗橙褐色		表7	323
P 3	2	土師質土器・皿		▲2.0	*5.8	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	淡黄褐色		山本ひ2	324
P 6	3	土師質土器・皿		▲1.8	*6.1	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	暗橙褐色		表1	326
P 24	4	土師質土器・皿	*9.0	2.0	*5.0	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	淡橙褐色		山本ひ1	635
遺構外	1	底部		▲3.3	*8.6	外面ハケメ	良好	淡赤褐色	風化著しい	山本ひ26	632
遺構外	2	弥生土器・鼓形器台	*21.3	▲11.0		内外面ハケメ?	良好	淡黄褐色	風化著しい	表39	508
遺構外	3	土師器・皿		▲3.7	*15.5	内外面ナデ	良好	赤褐色	赤色塗彩	表31	465
遺構外	4	土師質土器・杯		▲4.4	*7.8	内外面ナデ、高台貼付	良好	淡黄褐色		表29	626
遺構外	5	土師質土器・杯				内外面ナデ、高台貼付、底部糸切り	良好	淡黄褐色	外面赤色塗彩、風化著しい	山本ひ20	459,506
遺構外	6	土師質土器・底部		▲2.1	*5.8	内外面ナデ、底部糸切り	良好	淡橙褐色		表30	292

表3 出土遺物観察表(1)

(*…復元値、▲…遺存値)

遺構名	遺物番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底部径(cm)	手法上の特徴	焼成	色調	備考	実測者No.	取上げNo.
遺構外	7	土師質土器・底部		▲1.6	*5.4	内外面ナデ、底部糸切り	良好	暗橙褐色		表45	351
遺構外	8	土師質土器・皿	*13.7	3.0	*8.2	内外面ナデ、底部糸切り	良好	暗黄褐色	内面ヘラ描き文	表32	528
遺構外	9	土師質土器・底部		▲1.2	*6.6	内外面ナデ	良好	橙褐色		表10	453
遺構外	10	土師質土器・皿	8.0	1.5	3.0	内外面ナデ、外面底部と内面口縁部指頭圧痕	良好	淡黄褐色	内面口縁部わずかに赤色塗彩?	表36	473
遺構外	11	土師質土器・脚部		▲2.8	*5.2	内外面ナデ	良好	橙褐色	風化著しい	山本ひ39	502
遺構外	12	土師質土器・小壺		▲4.3	*3.7	内外面ナデ、外面底部指頭圧痕	良好	淡黄褐色		表35	348
遺構外	13	須恵器・椀	*15.0	▲3.2		内外面ヨコナデ	良好	灰白色		山本ひ27	542
遺構外	14	須恵器・椀	*15.6	5.0		内外面ヨコナデ、底部糸切り	やや不良	灰白色		山本ひ23	210,267
遺構外	15	須恵器・小型椀	9.4	3.8	4.2	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	青灰色		山本ひ25	385
遺構外	16	須恵器・小型椀	8.6	4.0	4.1	内外面ヨコナデ、底部糸切り	良好	青灰色		山本ひ24	235
遺構外	17	須恵器・高台部		▲2.1	6.4	内外面ヨコナデ、底部糸切り、高台貼付	良好	青灰色		山本ひ29	547
遺構外	18	須恵器・底部		▲2.3	*6.2	内外面ヨコナデ、底部糸切り、糸切り痕の上にハケ痕あり	良好	淡青灰色		山本ひ33	507
遺構外	19	須恵器・甕口縁	*26.6	▲9.8		内外面ヨコナデ、外面櫛状工具による波状文	良好	青灰色		表44	437
遺構外	20	須恵器・甕口縁	*18.5	▲7.4		口頸部内外面ヨコナデ、肩部外面平行タタキ、内面同心円状タタキ	良好	淡青灰色		表41	255,248
遺構外	21	須恵器・甕口縁	*28.2	▲5.9		口頸部内外面ヨコナデ、肩部外面平行タタキ、肩部内面継方向のハケメ?	良好	青灰色		表40	403
遺構外	22	須恵器・壺口縁		▲8.0		内外面ヨコナデ、内面頸部指頭圧痕	良好	青灰色		山本ひ31	348
遺構外	23	須恵器・壺		▲32.0		内外面ヨコナデ、内面胴部指頭圧痕	良好	青灰色	肩部2条の貼付突帯、耳の剥離痕あり	山本ひ28	349,458
遺構外	24	須恵器・壺底部		▲4.1	*14.2	内外面ヨコナデ、底部一部剥離	良好	青灰色		山本ひ30	349
遺構外	25	須恵器・捏ね鉢底		▲7.2	*15.3	内外面ヨコナデ	良好	青灰白色		山本ひ34	276,530,533
遺構外	26	平瓦				凹面布目、凸面ナデ	良好	暗灰褐色		表52	624
遺構外	27	平瓦				凹面布目、凸面ナデ	良好	暗灰褐色		表51	191
遺構外	28	須恵器片				外面平行タタキ、内面同心円状當て具痕	良好	青灰色		表55	589,629
遺構外	29	須恵器片				外面平行タタキ、頸部内面カキメ?	良好	外面淡青灰色、内面青灰色		表56	136,546
遺構外	30	須恵器片				外面平行タタキ、内面同心円状當て具痕	良好	青灰色		表54	590
遺構外	31	須恵器片				外面平行タタキ、内面同心円状當て具痕の上をナデ	良好	外面暗青灰色、内面淡灰白色		表57	93
遺構外	32	須恵器片				外面格子目タタキ、内面同心円状當て具痕	良好	青灰色		表60	404
遺構外	33	須恵器片				外面格子目タタキ、内面ナデ	やや不良	外面淡檳褐色、内面淡灰白色		表53	37
遺構外	34	須恵器片				外面格子目タタキ、内面ナデ	良好	青灰色		表59	465
遺構外	35	須恵器片				外面格子目タタキ、内面ナデ	やや不良	淡灰色		表58	463
遺構外	36	綠釉陶器・椀		▲3.5	*6.6	外面高台部まで施釉、高台部内面露胎	良好	淡灰緑色	京都洛西産	山本ひ12	244
遺構外	37	白磁椀	*18.0	▲2.0			良好	黄白色	椀II-1類	山本ひ16	245
遺構外	38	白磁椀	*16.2	▲3.3			良好	灰白色	椀IV類	山本ひ15	269
遺構外	39	白磁椀		▲2.5			良好	灰白色	椀IV類	表26	56

表4 出土遺物観察表(2)

(*…復元値、▲…遺存値、L:長さ W:幅 T:高さ)

遺構名	遺物番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底部径(cm)	手法上の特徴	焼成	色調	備考	実測者No	取上げNo.
遺構外	40	白磁碗	*19.0	▲2.9			良好	灰白色	楕V-2類	山本ひ17	450
遺構外	41	青磁碗		▲3.8			良好	灰緑色	龍泉窯系碗IV~	山本ひ18	391
遺構外	42	青磁碗					良好	灰緑色	龍泉窯系碗III-2類	表28	45
遺構外	43	陶器・高台部		▲2.5	*4.7	内外面高台部まで施釉	良好	黄灰色		山本ひ13	347
遺構外	44	白磁・高台部		▲1.9	*5.7	外面高台部露胎	良好	灰白色		表21	168
遺構外	45	白磁皿				内面見込み部沈線花文	良好	灰白色	皿VIまたはVII類	表42	446
遺構外	46	白磁皿				内面見込み部沈線花文	良好	灰白色	皿VIまたはVII類	表43	483
遺構外	47	白磁皿	*10.6	2.5	*3.6		やや不良	灰白色	皿V-1類	山本ひ11	507
遺構外	48	白磁皿	*10.6	2.6	*4.0	内面見込み部文様	良好	灰白色	皿V-1類	表22	602
遺構外	49	白磁皿		▲0.8	*3.8	内面見込み部沈線花文	良好	灰白色	皿VI-2b類	表23	512
遺構外	50	白磁皿		▲1.4	*4.0	内面見込み部草花文	良好	灰白色	皿VII-1b類	表24	213
遺構外	51	瓦質鍋	*28.0	▲6.5		外面ヨコナデ、指頭圧痕、内面ヨコハケ	良好	灰茶褐色		山本ひ21	526,527
遺構外	52	瓦質鍋	*25.4	▲12.7		外面ヨコナデ、指頭圧痕、内面肩部以下ケズリ?	良好	灰茶褐色		表33	551
遺構外	53	瓦質鍋	*26.9	▲5.9		外面ヨコナデ、指頭圧痕、内面ハケメ	良好	灰茶褐色		山本ひ22	521,523
遺構外	54	瓦質羽釜	*26.7	▲3.4		外面鍔貼付後ヨコナデ、内面ヨコナデ	良好	灰茶褐色		表34	474
遺構外	55	備前焼・播鉢	*26.0	▲5.5		内外面ヨコナデ	良好	暗赤茶褐色		山本ひ14	354
遺構外	56	備前焼・甕口縁	*14.9	▲3.3		内外面ヨコナデ、内面頸部にハケ状の擦痕	良好	暗赤茶褐色		表27	604
遺構外	57	砥石	L:5.5	W:4.0	T:2.6	上部欠損、砥面4面、64.5g				表47	446
遺構外	58	砥石	L:6.0	W:2.3	T:1.9	砥面1面、34g				山本ひ38	597
遺構外	59	鉄器・鉗?	L:5.4	W:1.8	T:1.1					表49	276
遺構外	60	鉄器・鉗?	L:5.7	W:1.7	T:1.2					山本ひ41	559
遺構外	61	鉄器・鉗?	L:6.0	W:1.3	T:1.1					山本ひ40	337
遺構外	62	鉄器・鉗?	L:3.0	W:0.9	T:0.8					山本ひ42	276
遺構外	63	鉄器・鉗?	L:3.8	W:1.4	T:1.2					表50	276
遺構外	64	土錘	L:3.6	W:1.3	T:1.3	上下欠損	良好	橙褐色		山本ひ36	177
遺構外	65	土錘	L:3.3	W:1.3	T:1.2	上下欠損	良好	橙褐色		山本ひ37	630
遺構外	66	五輪塔・火輪		W:18.8	T:10.0	4.8kg				表48	613

表5 出土遺物観察表(3)

表6 白磁、青磁分類表

白 磁 梗			白 磁 皿			青 磁 梗	
II類	4	II類 計12	II-1またはIII類	2	2	龍泉窯系III-2類	1
II-1類	8		V-1類	3	3	龍泉窯系IV類~	1
IV類	5	IV類 計6	VまたはVI類	1	1		
IV-a類	1		V~VII類	2	2		
IV~VII類	10	10	VI-2b類	1	2		
V類	2	V類 計9	VI-a類	1			
V-2類	3		VIまたはVII類	4	4		
V-1またはV-2類	1		VII-1b類	1	1		
V類?	3		VII類?	1	1		
V~VII類	2						
	梗計 39			皿計 16			青磁梗計2

佐貫上台遺跡土器組成（中世）

土師質土器	1103点……70.3%
須恵器	351点……22.4%
瓦質土器	38点…… 2.4%
貿易陶磁（白磁・青磁）	57点…… 3.7%
陶器	5点…… 0.4%
その他	14点…… 1.0%

※数値は破片数をもとに算出したものである。全体の構成比を正確に反映したものではないが、参考までに挙げておく。

写 真 図 版

図版 1



調査前空撮（西から）



調査前全景（北から）

図版 2



調査区土層断面（1）（東から）



調査区土層断面（2）（東から）



調査区土層断面（3）（東から）



調査区土層断面（4）（東から）

図版 3

S K 1 検出状況

(南から)



S K 1 土層断面

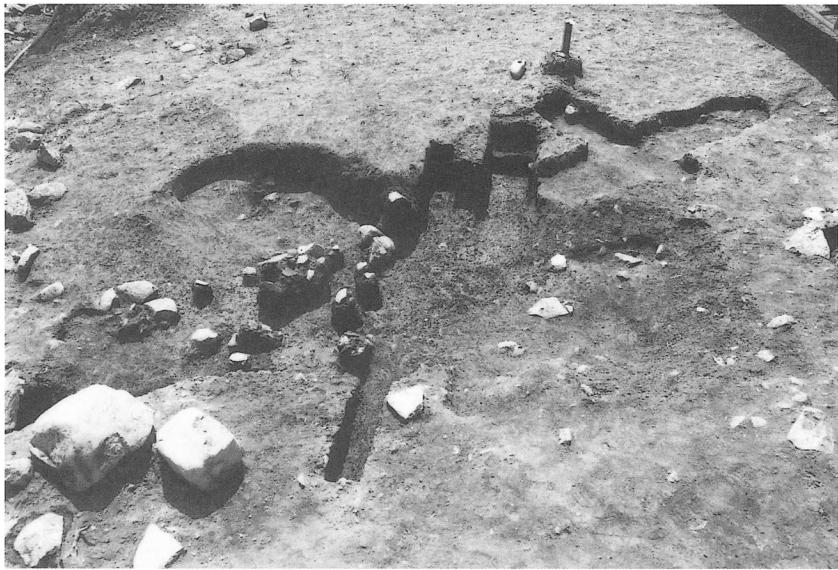
(南から)



S K 1 遺物出土状況 (北西から)



図版 4



SK 3 遺物出土状況 (北西から)



SK 3 土層断面 (南から)



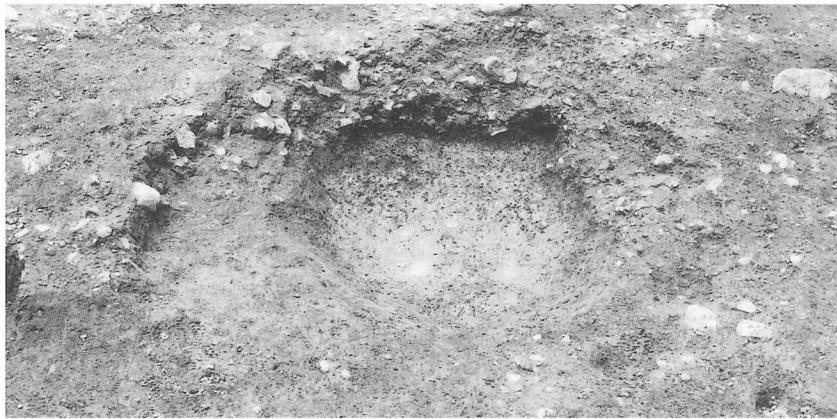
SK 3 完掘状況 (北西から)

図版 5

SK 2 遺物出土状況
(南から)



SK 4 完掘状況
(北から)



SK 5 完掘状況
(北から)



SK 6 完掘状況
(東から)



図版 6



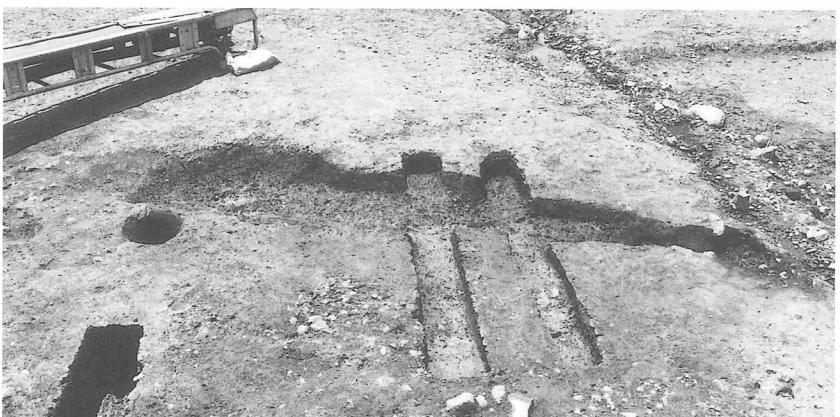
SD 1 土層断面 (東から)



SD 1 遺物出土状況 (南から)



SD 1 完掘状況 (北から)

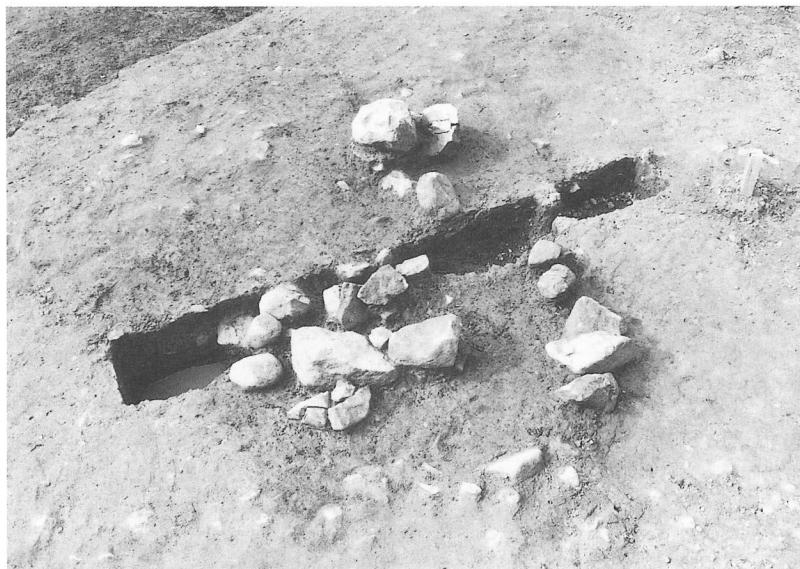


SD 2 完掘状況 (北から)

図版 7



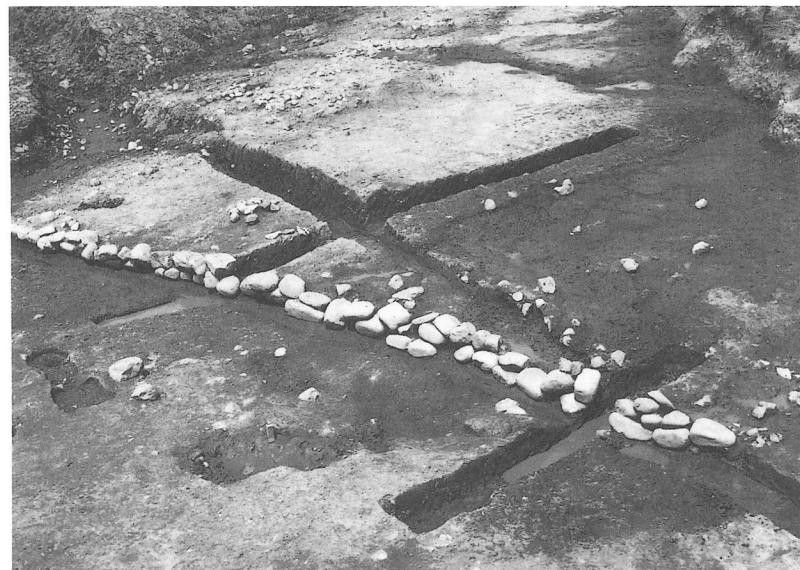
図版 8



集石 1 検出状況 (南から)



集石 2 検出状況 (西から)



石列検出状況 (南西から)

図版 9



包含層内瓦質鍋出土状況（北から）



包含層内土師質土器出土状況（北から）



包含層内緑釉陶器出土状況（東から）

図版10



調査区北東部分完掘状況（南西から）



調査区東側半分完掘状況（北から）

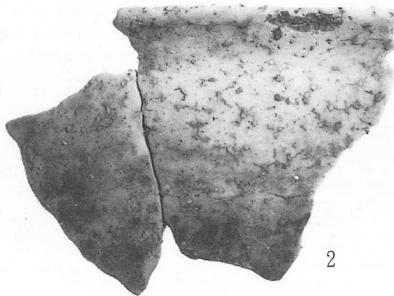


調査区西側半分完掘状況（北から）

図版11



SK 1



SK 1



SK 4-2

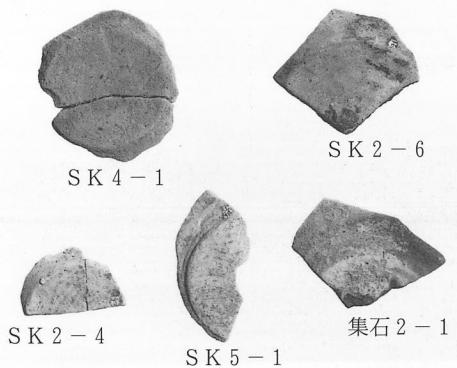


SK 2-2



SK 2-1

SK 2、4



SK 3



SK 3



1



2



3



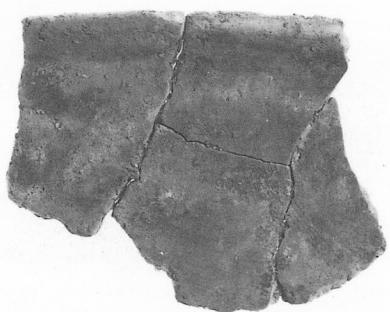
5

SK 3



SD 1

図版12



3

S D 1



4

S D 1



1

S D 2



1

P 3



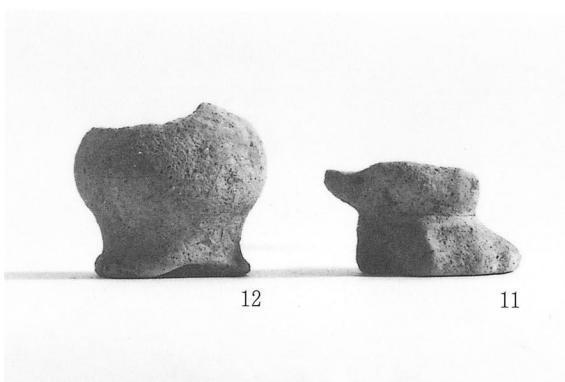
4



5



10

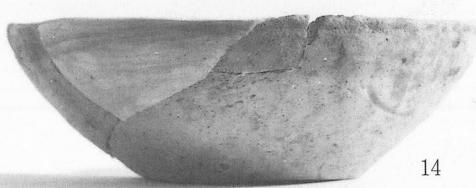
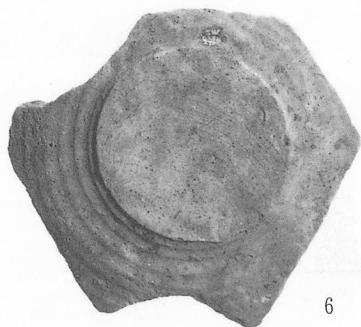


12

11

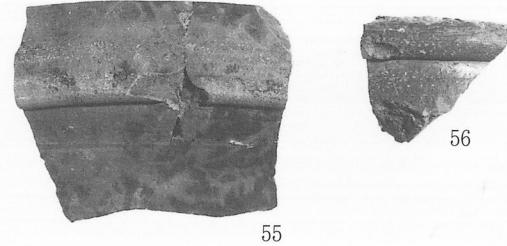
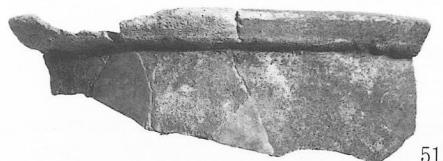
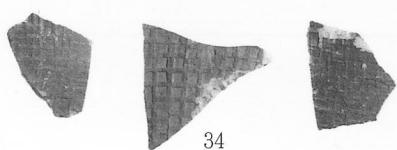
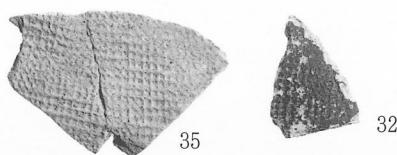
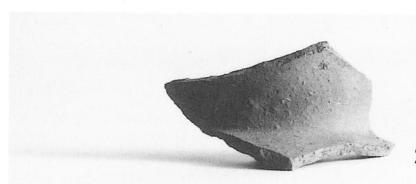
遺構外出土遺物

図版13



遺構外出土遺物

図版14

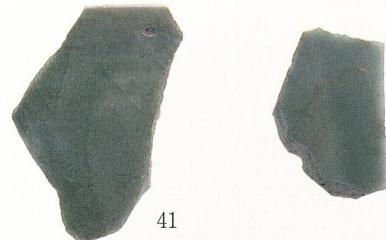


遺構外出土遺物

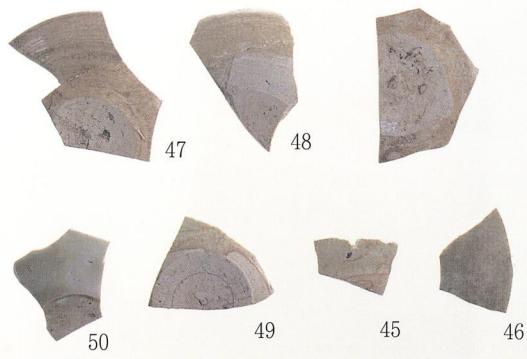
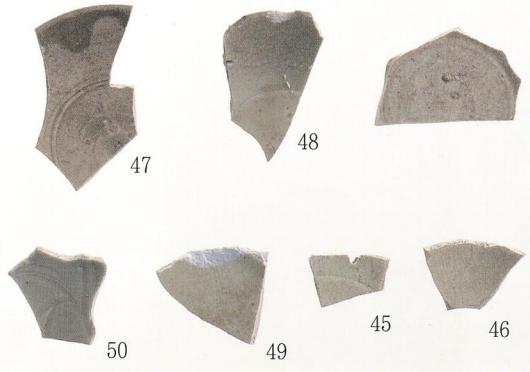
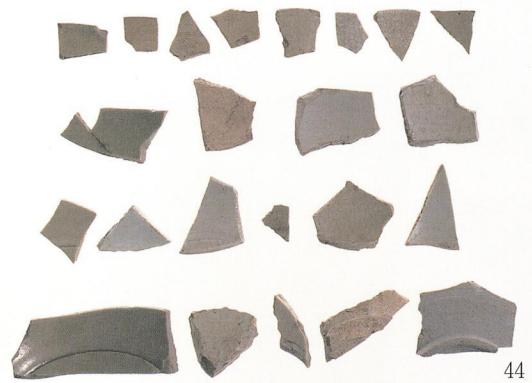
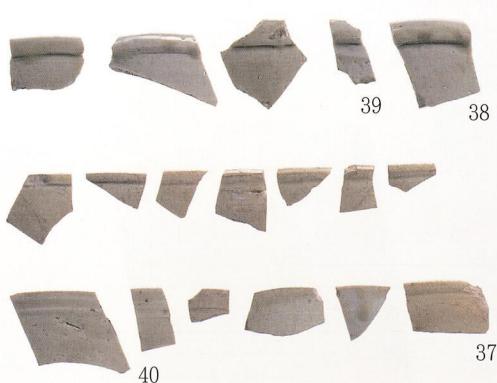
図版15



S D 1



遺構外出土物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さぬきうわだいいせき							
書名	佐貫上台遺跡							
副書名	中国横断自動車道（智頭～鳥取間）整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	69							
編著者名	鬼頭紀子							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260番地 TEL (0857) 27-6711							
発行年月日	西暦2000（平成12）年10月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
佐貫上台遺跡	鳥取県八頭郡 河原町佐貫 字上台 字岡崎	市町村	遺跡番号					道路整備事業
佐貫上台遺跡	31323	1-217	35度 22分 10秒	134度 12分 25秒	20000421 ～ 20000724	2,141.5		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
佐貫上台遺跡	その他 の遺跡	中世	土坑6、溝状遺構3 集石2、テラス状遺構、石列		須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、砥石、鉄器、五輪塔			

鳥取県教育文化財団調査報告書 69

中国横断自動車道（智頭～鳥取間）整備事業にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県八頭郡河原町

佐貫上台遺跡

発行 2000年10月

編集 財団法人 鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151 岩美郡国府町宮下1260

電話 (0857) 27-6711

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印刷 日ノ丸印刷株式会社